

血まみれヒーローと黒の少年

赤鏽はがね

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは黒い少年と、白い男の話。

殺さなかつた少年と、殺し続けた男の話。

一度気の迷いで消してしまった作品の再掲です。

原作沿いで捏造設定もりもり。かなりの数の夢主が登場します。

更新頻度低めですがご容赦ください。

本作はPixiv、ドリームノベル、占いツクールでも投稿しています。

目 次

序章・罪の子	1
第1章・黒い転校生①	3
第1章・黒い転校生②	6
第2章・対人戦闘訓練①	8
第2章・対人戦闘訓練②	11
第2章・対人戦闘訓練③	16
第2章・対人戦闘訓練④	19
第2章・対人戦闘訓練⑤	22
第2章・対人戦闘訓練⑥	25
第3章・秘密を知る者①	28
第3章・秘密を知る者②	31
第4章・懷疑①	34
第4章・懷疑②	37
第5章・教師と院長①	40
第5章・教師と院長②	43
第5章・教師と院長③	46
第5章・教師と院長④	49
第5章・教師と院長⑤	51
第5章・教師と院長⑥	54
第5章・教師と院長⑦	57
第6章・謎の少年①	60
第6章・謎の少年②	64
第6章・謎の少年③	67
第6章・謎の少年④	71

第6章・謎の少年⑤													
第6章・謎の少年⑥													
第6章・謎の少年⑦													
第6章・謎の少年⑧													
第7章・獣の住処①													
第7章・獣の住処②													
第7章・獣の住処③													
第7章・獣の住処④													
第7章・獣の住処⑤													
第7章・獣の住処⑥													
第7章・獣の住処⑦													
第7章・獣の住処⑧													
第7章・獣の住処⑨													
第7章・獣の住処⑩													
第7章・獣の住処⑪													
第8章・アザミの家①													

122 118 115 112 109 106 102 98 95 92 90 87 84 80 77 74

## 序章・罪の子

死にたいと思つていた。

それは、感傷とか、甘えとか、そういう類のものではなく、ただ純粹に、眞面目に、前向きに、がむしやらに、それは俺の願いだつた。一等星のようにきらきらひかる、美しい目標だつた。

だつて、俺がすべて悪いから。

俺がいなければ、こんなことにはならなかつたはずだから。

みんな、みんな、死んでしまつた。

ここでは死はあまりにも呆氣なく、まるでそうなることを生まれた時から決められていたように、たくさん命が日々奪われていつた。俺の命は俺の手にはなく、強い力を持つ誰かの手のひらの上で、握りつぶされ殺されるのをただ待ちわびる日々が、意味もなく延々と続いていた。

大切だつた、大好きだつた人たちはもう、とつくの昔にいなくなつてしまつたのに。

終わつてしまつた。ここから先はない。俺はもうどこにも行けない。それならもう、希望は死以外の形をとらない。恨みも哀しみもない。ただ底の見えないまつくな穴が、足元に口を開いて俺を呼んでる。あとは前に一步足を踏み出して、暗い暗い穴の底めがけて、飛び込むだけだつた。

そのはずだつたんだ。

「痛かつたな。苦しかつたな。でも、もう大丈夫だ」

誰かが俺に話しかけている。優しい声だ。こんな風に語りかけられたのなんて、いつぶりだろう。

俺は声のする方を見上げた。崩れた研究所の外壁から柔らかく差し込む太陽の光。それを背に受けて、白い服をまとった、白髪の男が立っている。夥しい量の血でべつたりと全身を濡らしながら、それでも凜と背筋をのばして立つそのひとに、俺は今まで信じてもいなかつた神様の存在を思つた。

「俺と来い。生きたいんだろう」

男はそう言つて、血に塗れた手をさしのべた。その言葉を聞いて、理解して、それでやつと、俺は自分が生きたかったのだということを知つた。滅茶苦茶に傷つけられて、孤独と罪悪感に苛まれたまま死ぬために、今日まで生きてきたわけじやなかつたんだと。

俺がすべての元凶だ。

俺がいなければこんなことにはならなかつた。

でも、それでも、生きることを許してもらえるのなら。

俺は生きたい。本当はずつとそうだつた。

どれだけ苦しくても、つらくても、生きたい。

生きて、この罪を償いたい。

血で浸されたリノリウムの床。原型をとどめないとたくさんのお死体に囲まれながら、おそるおそる握つた救いの手は、死んでいるみたいに冷たい。男が笑つた。泣いているみたいな顔だと思つた。

国内随一の犯罪者、前代未聞の凶悪殺人犯は。  
たつたひとりの、俺のヒーローだつた。

# 第1章・黒い転校生①

爽やかな五月晴れの空に、キーンコーンと高らかなチャイムの音が響く。小高い坂の上に建てられた立派な校舎が、窓に太陽の光を受けて眩しく輝いている。毎年優秀なヒーローを幾人も輩出する名門中の名門、雄英高校。そこに通う生徒たちの一 日が今日も始まる。

「オラお前ら、さつさと席につけ」

肩にバインダーを担ぎ、氣だるげに1—Aの教室に現れたのは担任教師の相沢消太だ。彼に気づくと、1—Aの生徒たちはおしゃべりをやめて速やかに席に着いた。相澤の口癖は「時間は有限」。まだ入学して1ヶ月ほどしか経っていない生徒たちの無意識下にも、徐々にその教えが刷り込まれ始めている。

「えー、突然ではあるが、今日は転校生を紹介する」

「ええええマジで!?」

「おおー!! ほんとに突然!!」

「何か学校っぽい行事キター!!」

「女!? 女か!？」

つかの間の静けさも一転、相澤の開口一番の発表に教室が一気にざわつき始めた。あまりの唐突さに突っ込みをいれる者、いかにも学校らしいイベントに胸を躍らせる者、まだ見ぬ転校生に妄想を巡らせる者。ヒーロー志望の中でも指折りの実力を持ちここに座している彼らではあるが、そのあどけない反応はいかにも高校生らしい。

(て、転校生があ……1年生の5月に転校って珍しいな。それに、雄英の編入試験って一般試験よりも難しいって聞くけど……やつぱりすごい優秀な人なのかな……どんな個性の人なんだろう)

そんな風に思いを馳せているのは1－Aの生徒の一人、緑谷出久だ。周りには一切秘密にしているが、ヒーロー界の頂点に立つ平和の象徴・オールマイトに認められ、彼の個性「ワン・フォー・オール」をその身に受け継いだ数奇な運命の中にある。憧れであり目標であるオールマイトに一步でも近づくため、日々奮闘中の彼が転校生の性別や容姿よりも個性の方に思いを馳せてしまうのは、もはや性であるとも言える。

「入つてこい」

相澤の呼びかけに教室のドアの向こうから「はい」という澄んだ声が応えた。がらりとドアが開き、真新しい雄英の制服に身を包んだ生徒が入ってくる。

それは少年だった。背はすらりと高く、このクラスの生徒である轟焦凍とほぼ同じくらいだろうか。濡れたような黒髪の下から、ふたつの鮮やかな赤い瞳がのぞく。ひどく整った顔立ちにその血のような色は異様に映えて、出久はその目と視線が合った瞬間、本能的に目をそらしてしまった。

転校生の登場に教室の騒がしさは頂点に達した。「やつばい、超イケメンじやん!!」「何だよ男かよ！ チェンジ!!」喜びと落胆と様々な声が入り交じるただ中に放り出され、前に立つた転校生は少々居心地が悪そうだ。

「初めてまして、一ノ瀬翔と言います」

教室が静けさを取り戻すのを待つて自己紹介を始めた少年の声は、りんと鈴が鳴るかのように美しく澄んでいて、出久の心臓は思わずどきりと跳ね上がった。まだ未成年とは言え、ほとんどが声変わりをし

ている男子高校生にあつて、その声は少し浮いてしまうくらいに甲高く、優しく、柔らかい調子を含んでいた。

まるでそう、女性のように。

(な、何を思つてるんだ僕は……!? 男の子の声を女の子みたいだなんて、失礼すぎるだろ!)

出久はぼさぼさ頭を左右に振り乱してたつた今浮かんだ思考を打ち消した。何やつてんだ緑谷、と転校生が男だと分かつて早くも興味を失つた後ろの席の峰田実が白い目を向けてくる。

「この度編入試験を受けて、雄英で学ばせてもらうことになりました。皆より遅いスタートで、色々迷惑をかけると思うけど、精一杯がんばります。よろしくお願ひします」

一ノ瀬翔と名乗つたその少年はそう言うと、ぺこりと小さく頭を下げた。もう一度よく耳を澄ませて聞いてみたけれど、その声はやはり自分たちと同年代の少年といった感じで、しつかりと声変わりもしており、少女のようにも中性的にも聞こえない。先ほどの声は聞き間違いだったのだろうかと、出久は首をひねつた。

## 第1章・黒い転校生②

「一ノ瀬の個性は翼と伸びる爪だ。伸縮、出し入れ自在で今は引っ込めてるけどな。また、編入試験で優秀な成績を収め、奨学金を受けることになつた特待生でもある。遅れをとるのはお前らの方かも知れんということだ。これを機により一層励むよう」

相澤の発した特待生という言葉に、再び教室がざわめいた。雄英のヒーロー科は2クラスの少人数編成のため、編入での生徒はほとんど受け入れない。編入試験はともすると入学試験より門戸が狭いとも言われる中、編入学どころか特待生として選ばれたということは、並大抵の実力者ではないということだ。いくつものどよめきと「すごい」という言葉を受け恥ずかしそうに笑う転校生に、相澤は空いている席を指さし着席を促す。

早くも普段のホームルームが始まる中、転校生が小走りに教室の後ろへ向かう。相澤が指定したのは出久の右隣の席だ。しかし出久はそれが見えていないかのように一心不乱に机にかじりついている。相澤が口にした転校生の個性を早速研究ノートに書きとめているのだ。

「一ノ瀬翔くん……翼と爪かあ。良いな、やつぱり空が飛べると戦闘でも救助でも自由度高くなるもんなあ。しかも出し入れ自由、敵側に個性を悟られずに近づけるのは大きい。爪はどのくらいの強度なのかな、折れたらもう生えてはこないのかな？　再生能力が高いとすればわざと折って、投擲系の武器としても使えそう。となると翼も……？　やばい、強度と再生力次第じゃ相当汎用性高いぞ……」

ぶつぶつと個性の推察を呟く出久の隣に、転校生が座る。自分のことを言つてているのだろうかという疑問に満ちたぎこちない視線に、深く考え込んでいた出久はしばらくしてからやつと気づいて顔を上げ

た。自分の隣に空いた席に転校生が座るとはまったく思つていなかつたのだ。

「あ、ジ、ジ、ジ、ジ、ジ、めん！　き、気持ち悪かつたよねブツブツと！　忘れて！」

「いや……」

やばい。先ほど転校してきたばかりの彼の声を女性のようだと聞き間違え、さらにはこんな失態まで犯してしまって。申し訳なさと恥ずかしさから尋常でない速度で手を顔の前で振る出久に、転校生はぎこちないながらもにこりとあたたかく笑う。

「気持ち悪くなんてないよ。よろしく、えっと……緑谷って、呼んでいいのかな？」

「！　うん！　よろしく！」

出久は差し出された手を握つて元気よく答えた。赤い瞳が優しく細められてこちらを見る。先ほど感じた異様さが嘘のようなその柔和な雰囲気に、出久は失態を犯した不安が一気に払拭されていくのを感じた。間違いなく、この人、とつてもいい人だ。

挨拶が終わると、転校生は早速隣の瀬呂に声をかけられ、そちらと話しだした。出久は今し方握手を交わした手をじつと見つめ、ふと思いついた。

(あれ？　僕、自分の名前教えたつけ？)

## 第2章・対人戦闘訓練①

「今日は入学当初からやつてきた、対人戦闘の基本の総復習だ」

五月の風が吹きつける演習場で、相澤が声を張る。背の高い建物が居並ぶ路地では必然的に風の勢いが強くなり、生徒たちの髪の毛やジャージの裾をばたばたとはためかせる。

「今から一対一での勝負を行い、片方を戦闘不能にした者の勝利。判断力や立ち回り方を主として評価を決める。あらかじめ配布したプリント通りにペアになつておけ。はじめは切島対上鳴。次は——」

出久は授業前に配られたプリントを相澤の説明に合わせて読み進めた。相手は八百万百。個性も頭脳もとても優秀な生徒であるだけに、緊張と期待もひとしおだ。どんなふうに戦おうか、と胸をどきどき高鳴らせながら視線を下ろしていくと——予想だにしなかつたとんでもない文字の羅列が目に飛び込んできた。

「——ラストは、爆豪対一ノ瀬。以上だ」

相澤の読み上げる声を遠くに聞いて、出久はぴしりと表情を固まらせたまま悟る。

これはまずい！

「頭に入れておくべきことは一つ。いかに迅速に、周りへの被害を最小限に、また敵を過ぎた損傷を与えずに捕まえることができるか。よく肝に銘じろ。はじめ！」

相澤の号令とともに、ビルとビルの間の路地で最初のペアである切島と上鳴の試合が始まる。と同時に、出久は少し離れたところでクラ

スマートに囲まれている転校生の方へ近づいた。こうした実技訓練はいつでも行われるわけではないので、本当はどのペアの試合も見逃したくはない。だがそれでも、これだけは伝えておかなければならぬんだろう。「爆豪勝己には気をつけろ」と。

爆豪勝己。出久の幼なじみであり、この雄英1—Aのクラスメートでもある少年。彼はストイックで戦闘センスはピカイチだが、その実攻撃的な性格で容赦というものを知らない。突如現れた優秀な転校生に敵意を見せないなんてことはまずあり得ないだろう。いやむしろ、ホームルームで早くも同級生達からもてはやされた彼の鼻つ柱を叩き折つてやろうと、いつもより氣合いを入れてくるかも知れない。転校してきたばかりで勝己の素性を知らない彼がひどい目に遭うのは火を見るよりも明らかだつた。

なぜ彼と勝己を組ませたのか先生に問いただしたいくらいだが、決まつてしまつたものは仕方がない。せめて忠告だけでもしておけば何か対処できるかも知れないと思い、出久はクラスメート達の間に体を割り込ませ、囲まれて質問攻めにあつてている転校生のもとへ近づいた。

「い、一ノ瀬くん、ちょっと」

出久の小さな声にも、転校生はすぐ反応した。前髪に隠れて影になつたところから覗く赤い目が、微かに光りながら出久を捉える。

「何?」

赤く光る妖艶な目に反し、転校生の声はとても穏やかだ。性懲りなく跳ね上がる心臓を上から手で押さえつけ、出久は転校生をクラスメートの輪から少し離れた場所へ連れて行つた。

「あ、あのね、こんなただの余計なお世話かも知れないから流してくれても全然構わないんだけど……」

そう言う出久の話し方は早口で声も小さい。よく考えたら周りのクラスメートも爆豪の性格は知るところだから、もう既に忠告を受けた後なのかも知れない……と、呼び止めた後になつてそんなことばかり気になり、無駄に前置きが長くなってしまう。気の小さい出久独特的の語り口だ。

「一ノ瀬くんの相手、かつちや……爆豪、くん、だよね？」

「え？ ああ、うん。そうみたいだ」

そう言われて、転校生は手に持っていたプリントに視線を落とした。

「ばくざう……かつき、つて読むのか。かつこいい名前だよな」

「う、うん。て、いや、そうじやなくて。あのね、こんなこと言うとちょっと、角が立つって言うか、その……なんだけど。爆豪くんつてすつごい凶暴……じやなかつた、容赦ないから、気を付けた方が……」

「なアーに吹き込んでくれてンだデクてめエ」

## 第2章・対人戦闘訓練②

チンピラのようなどすの利いた声が後ろから覆い被さり、出久は反射的に背筋をのばした。嫌な予感を全身に駆けめぐらせたまま、ゆっくりと振り向く。そこには明るい色の髪をツンツン跳ねさせ、ぎらりとした橙色の目でこちらを睨みつける、爆豪勝己その人がいた。

「か、かつちゃん……！」

「どこの誰が凶暴だつて？　ああ？　言つてみろやゴラ」

勝己はどうやら出久が転校生に耳打ちするのを聞いていたようだ。全身から怒気を発し片頬を歪ませながら凄んでくる。いつも思つていることだがおよそ正義のヒーローになるために日々学んでいるようには見えない悪党つぽさだ。

「ただでさえてめエを叩きのめせねえからイライラしてたつづーのに……」れ見よがしにこそこそ陰口叩きやがつててめエはよお……」

「か、陰口なんてそんな人聞き悪いよ、僕はただ……」

「口答えすんなクソナードが!!」

反論しようとしたところをすかさず怒鳴りつけられ、出久は「ひい！」と悲鳴を上げてすぐみ上がった。雄英で初めての演習があつた際、二度と勝己を怖がらないと決心した出久ではあるが、今回は陰口を叩いていると勘違いされてもおかしくない行動をとつた自分が全般的に悪いのでどうしても態度が下手に回ってしまう。

ずんずんと近づいてくる勝己。と、その前に誰かが立ちはだかつた。背に庇うように腕を引かれ、突然のことに出久は少したたらを踏む。

「ああ？」

「やめろよ。そういう言い方」

出久は呆然として、目の前に自分を守るように現れた背中を見つめた。転校生が出久と勝己の間に割つて入ったのだ。赤い瞳が強い意思をはらんで勝己を見据えている。

「何だてめエ。やるつてのか？」

「やるつて何を？ 雄英には私闘をしても良いって決まりでもあるのか？」

そう言い返され、勝己の怒りの矛先は完全に転校生へ方向転換した。額を近づけ、脅すように目を眇めて転校生をねめつける。しかし転校生は動じることなく、鋭く静かな視線を勝己に注ぎ続ける。

「正義のヒーロー気取りかよ、氣色悪いな」

「気取りもするさ。ここ、ヒーロー科だろ」

両者の間に何とも言えない沈黙が流れる。肉食獣がにらみ合っているかのような独特の緊張をはらんだ対面に、出久ははらはらしながら視線をさまよわせることしかできない。勝己は当然のごとく好戦的だが、転校生も転校生でまつたく物怖じせずに真っ正面から対峙している。物腰も柔らかく優しそうな雰囲気を醸し出していただけに、まさか転校生がこんな行動にでるとは思つてもみなかつたのだ。

「俺はまだここのこと良くな知らない。でも他人にそういう突つかかり方をするのは良くないってことくらい分かるさ。爆豪は緑谷に何か恨みもあるのか？」

転校生のこの一言に、成り行きを傍観していたクラスメート達の間にも緊張が走つた。勝己と出久が幼なじみで、その上何か並々ならぬ

因縁があるということは1—Aの生徒全員が周知している。そこはふれてはいけない部分だということを、そこを突くということは勝己の堪忍袋の緒を驚撃みにすることと同意だということを、転校生だけが知らなかつたのだ。

そして案の定、一般市民に絡むチンピラ程度の態度を保つていた勝己の怒気が、積乱雲のように一気に膨れ上がつた。転校生の真新しいジャージの襟首を掴み上げ、吠えるように凄む。

「ああ!! てめエの知つたことじやねえだろうがよ!! ぶちのめされたくないきやほつとけクソが!!」

「ぶちのめす?」

しかし胸ぐらを掴まれ至近距離で怒鳴られても、転校生の声は至つて落ち着いていた。驚いたように目を丸くして、勝己が今叫んだ言葉を復唱する。本気で言つているのか、とでも言いたげな表情をして。

その口が、わらつた。水面に滴が落ちて、その波紋がふわりと広がつていくように、表情が顔全体に広がつて不敵な笑みを作つた。瞳からぎらぎらと好戦的な光をこぼしながら、転校生が言う。

「それはどうだろう。ぶちのめされるのはお前の方かも知れないよ」

その言葉に、勝己の表情が変わつた。怒氣をおさめ、転校生と同じようになに不敵に笑つてみせる。

「……はアン。なるほどな。上等だ。そういう態度は嫌えじやねえぜ」

勝己は襟首を捻り、突き飛ばすようにして転校生を解放した。後ろに庇わっていた出久は、煽りを食らいながらもよろめく転校生を受け

止める。

「首洗つて待つてろ。転校してきたこと後悔するくらいにボロクソに叩きのめしてやるよ」

そう吐き捨てる、勝己は踵を返して転校生と出久から離れていった。とりあえず一段落した様子を見届け、見守っていたクラスメート達の緊張の糸が一気に緩んでいく。勝己が叫んだので何事かと目を凝らしていた相澤も、二人が離れたのを見ると視線を試合の方に戻した。

どうにか先生からのお咎めもなく事態が収束したので、出久は安心から大きく息をついた。黙つて勝己の後ろ姿を見つめる転校生の前に回り、申し訳なさげに謝る。

「い、一ノ瀬くん、何か、ごめん。僕が余計なこと言つたからかっちゃんと……」

「いや、いいよ。俺が煽るようなこと言つちゃつたんだし。それにさつき。まだクラスメートの個性とか性格とか知らない俺に、こつそり爆豪のこと教えてくれようとしたんだろう?」

出久は目を丸くした。途中で勝己が割つて入つたせいで言いかけになつてしまつていた言葉を、転校生はちゃんと聞いていたのだ。

「ありがとう。優しいんだな、緑谷は」

にこ、と端正な顔で優しく微笑みかけられ、出久は自分の顔が一気に火照つていくのを感じた。こんなにあからさまに、というか、面とむかつて感謝されることはほとんどないので、何だか無性に恥ずかしくなつてしまう。

「い、いいいいやいやいや！ そんな、僕は……ていうかそんなことより、かつちちゃん怒らせちゃつたから本当に、その、危ないかも……」

「ははっ、大丈夫だよ」

出久の言葉に、転校生はやはり怯むことなく爽やかに笑った。遠ざかっていく勝己の背中を見つめ、唇の片端をわずかにつり上げる。

「負けるわけがない」

だ、断言した。優秀であるだけに、自信も相當にあるらしい。

（優しいひとだけど……何か、血気盛んなところもあるんだな……）

出久は目をぱちぱちさせながら、妙に納得した。

## 第2章・対人戦闘訓練③

対人戦闘演習は順調に続き、ついに最後の対戦を残すのみとなつた。今日転校してきたばかりの、個性も知れない実力未知数の転校生。対するのはクラス随一の戦闘センスと獰猛性を誇る勝己。当然クラスメート達の注目度は高く、誰もが固唾をのんで試合が始まるのを待っている。

「ではラスト、一ノ瀬対爆豪だ。転校初日に演習なんぞ災難だとは思うが、これが雄英のやり方なんだな。慣れてくれ」

相澤が一言そう声をかけると、転校生は準備体操をしながらにこりと笑つて「構いませんよ」と答えた。同じように体を温めながらも転校生を終始にらみ続けている勝己を見て、出久は気が気でない。やっぱり余計なことをするんじゃなかつた、転校生はああ言つていたが本当に大丈夫なのだろうかと、後悔と不安が脈を速くさせる。

「では始め！」

相澤の合図とほぼ同時に、まずは勝己が飛び出した。姿勢を低くして転校生の懷に飛び込み、右から爆破を食らわせようとしている。それはまさに電光石火の攻撃で、見ていた出久は思わず息をのんだ。

右から攻撃するのは相変わらずだが、以前出久と対戦した際に指摘されたのを覚えていたのか、よりタイムロスがなくなるよう腕の軌道を修正している。キレもあり、何より速い。こんなもの、そう簡単に避けられないだろう。

「あぶな……！」

出久は思わず叫びかけた。が、すぐにそれが杞憂であつたことを知る。勝己の右の手のひらが爆発を起こす一瞬前に、転校生がひらりと跳躍してその攻撃をかわしたからだ。やや前のめりの姿勢から左腕を突きだし、前傾姿勢になつた勝己の肩に手をかける。そのまま勝己の背に自分の背を合わせるようにしてくるりと一回転し、軽やかにステップを踏んで距離をとつた。

これには息をひそめて見守つていたクラスメート達の間からもどよめきが起こつた。戦闘センスが飛び抜けている勝己の渾身の一撃を、片腕一本で易々とかわしてみせたのだ。その軽やかでしなやかな身のこなしは、彼が優れた戦闘能力を持っていると証明するのに十分なものだつた。

「クソッ……が、まだだ!!」

渾身の一撃をあまりにも容易くかわされ、早々に勝己の苛立ちのメーカーが限界まで振り切れた。すぐに振り向き、鋭く左足を踏み出す。焦つたのか、まだ右からの攻撃だ。転校生は今度は力を抜くようにして上体を後ろに倒した。対象物を失つて宙をかく勝己の右腕を下から掴み、そのまま右、勝己から見て左の方に思い切り引っ張る。

体勢を崩された勝己は咄嗟に空いた左の手のひらを爆破させて立て直そうとしたが、踏ん張ろうとした左足を転校生の右足に掬われ、さらにバランスを崩してしまつた。大きくつんのめるのを回避しようと、何とか体を丸め地面の上でぐるりと前回りをする。数mの距離をとつてすぐさま振り向くと、既に臨戦態勢で体を構えた転校生と視線がぶつかつた。

勝己を見下ろすようにして、整つた顔がにこりと微笑む。

「うまいね。でもまだまだだ」

「あ』『あ!?』

さも余裕だとばかりに言われ、勝己は思わず涙んだ。それにも動じず、転校生の目がきらりと赤い光をこぼす。

「知らないもんね。君は、まだ」

その小さな、呟きとも言えないような呟きを、もつとも近くにいた勝己だけが確かに聞いた。抑揚がなく、何かの感情を抑えつけたように妙に平坦なその声は、聞く者の心をざわつかせる不思議な響きをはらんでいた。

勝己の橙色の瞳に、転校生の端正な笑顔が映り込む。

「今度はこつちからいくよ」

## 第2章・対人戦闘訓練④

そう言い終わるやいなや、転校生の体に変化が起こり始めた。めきめきと音を立てながら両手の指が膨らんでいき、指に生えた黒い爪が鋭く尖りながら伸びていく。同時に背中からは折り畳まれた黒い筋のようなものが二つ、ずるりと何か体液のようなものに濡れて糸を引きながら姿を現した。それは外気に触れるやいなや急速に乾いてふくらみ、鴉の羽のようなさらりとした質感を得ていく。

そこにいた誰もがその光景に釘付けになつた。まるで、さなぎが殻を破り蝶に生まれ変わっていく瞬間を目撃しているかのように。

「あれが、一ノ瀬くんの個性……」

出久は思わずそう呟いた。出し入れ自在の爪と、翼。相澤の説明を聞いただけではぴんと来なかつたが、実際に目にするどっこか壮絶なものがある。身長ほどはあろうかというほど大きな黒い翼と、7、80 cmほどに伸びた黒い爪。相当硬い材質でできているのか、合計10本あるその爪は太陽の光をうけてざらりと輝き、その高い殺傷能力を雄弁に物語つている。

こんな喩えをするのは我ながら恥ずかしい。だが誰もが思つたことだろう。その姿はさながら地上に舞い降りた悪魔だつた。黒い翼を背負い、黒い爪を携え、ただ二つの瞳だけが爛々と、こぼれた血液のようにどす赤い光を放つてゐる。様々な個性が世にはびこる現代にあつて、転校生のような個性は特別珍しいというわけでもない。それなのにその姿は妙に異質で、この世界とひどく相容れていないように見える。

そんな、転校生が放つ独特の雰囲気に出久が生唾を飲み下すのを待

たず、翼が乾き準備が整つた転校生が足で素早く地を蹴った。両腕を引き、体勢を低くして加速する。その電光石火の動きに勝己はやや狼狽えつつも、右腕を突き出して迎撃の姿勢をとつた。

しかし。

バシイツ!!

鋭い音と共に、構えられていたはずの勝己の右腕が思いきり体の外側に弾き飛ばされた。転校生が伸びた爪の甲で、勝己の腕を斜めに払い飛ばしたのだ。

衝撃で片足が浮き、大きく体勢が崩れた勝己は何とか迎撃しようと試みたが、転校生の次手の方が遙かに速かつた。勝己の腕を払つた左腕の勢いをそのまま利用し、左足を軸にして一回転、翼をうまく使って加速した動きを右足に乗せ、勝己の無防備になつた腹部を一閃した。ボゴツ、と鈍い音と共に、蹴り飛ばされた勝己の体が数メートルの路地をころころと転がっていく。

勝己が吹き飛ばされた衝撃で舞い上がつた砂埃の中、観戦していたクラスメート達は啞然とした。今日の前で何が起つたのか、それを飲み込むのすら難しい一瞬の出来事だつたからだ。

「すゞい……」

出久は思わず感嘆の息を漏らした。転校生の動きがあまりに素早く、また洗練されていたからだ。ほとんど個性を使うことすらなく、勝己ほどの実力者をまったく寄せつけずに立ち回る、そんな芸当ができる者がいつたいこの1—Aに何人いるだろうか。

何か見てはいけないものを見ているような気分になり、出久の額か

らするりと一筋の汗が滑り落ちる。幼い頃からあれほどに憧れ、目標として見据えていた幼なじみが、まるで子どものように軽くあしらわれている。いつもは堂々として動きにも迷いがない、クラス随一の戦闘力を誇る勝己が、今は為す術もなく擦り傷だらけで路地の端っこに放り出されている。その様は出久の胸を妙にざわつかせた。が、それでも一分たりとも視線を逸らすことができない。ただ傍観している者すら支配する、それほどの気迫を、転校生はその黒い翼のように背中に纏っていた。

だが、それもこのクラス一、いや、雄英一負けん気の強い男の肝つ玉を潰すには足りないようだ。

「くつそが、調子、乗つてんじやねえツツ!!」

## 第2章・対人戦闘訓練⑤

演習場いっぱいに響きわたるような大声で勝己が吠える。体を前傾姿勢にして叫ぶ姿はさながら血の気に溢れた獣のようだ。ごうごうと燃えさかる炎のような怒気を身に纏い、転校生へ向けて突進する。

端から見れば完全に我を忘れているように見えたが、勝己はそこまで考えなしではなかつた。先ほど腕一本であしらわれたことを踏まえ、そのまま真正面から攻撃するような真似はせず数メートル手前で左の手のひらを爆発させ上方に跳躍した。そのまま不規則に両手に爆発を起こし、うまくバランスをとりながら急速に転校生に近づいていく。

そのまま頭上から来るか、それとも背後に回り込むのか、その不規則な動きからは予測がつかず迎撃するのはかなり難しそうだ。戦闘センスのすば抜けた勝己だからこそ実現できる一手だつた。

だが、そんな勝己の動きを見て尚転校生はほとんど表情を崩さなかつた。勝己の襲撃を受け止めるように両翼をいっぱいに広げ、やや後方に跳躍する。そのまま翼の両端を付けるようにして思い切りそらし、ばさりと一度強く羽ばたいた。その瞬間。

「うわっ！」

突如吹き荒れた突風に、出久を含めた1—Aの生徒たちは悲鳴を上げた。転校生の強靭な翼で、体が後ろに持つていかれそうなほどの風が生まれたのだ。離れたところにいた出久たちでさえそうだったのだから、それをもろに正面から受けた勝己はひとたまりもなかつた。手のひらの爆発はたちまちにして消え、転校生に飛びかかるうと全身

に乗せていたスピードは落ち、そのままベしやりと腰から地上に落下した。

転校生の攻撃はそれだけでは終わらない。勝己が地上に落ちてくるや否や、ものすごいスピードで前進し距離を詰め、落下の衝撃でうずくまつている勝己の腹部に掌底を食らわせた。立て続けに攻撃を受け、勝己は反撃をしようと構える暇もなくさらに後方に吹き飛ばされた。

バガアン!!

「がはっ……！」

待ちかまえていたビルの壁に、勝己の体が音を立ててめり込む。瞬間的に呼吸ができなくなり声もなく喘ぐ勝己に、休む間もなくさらなる一手が襲いかかつた。翼を軽くはばたかせ推進力を得た転校生が、身動きのとれない勝己に音もなく迫つたのだ。

両足を突き出し勝己の腹の両側あたりの壁に着地すると、そのまま上半身を大きく反らせて両腕を引いた。掌底を食らわせたときには引っ込ませていた爪がいつの間にか伸びていて、五月晴れの太陽の光を受けてぎらりと妖しく光る。合わせて十本あるそれはまるで獲物に飢えた獣の牙のように、壁にぶつかつた衝撃で動けない勝己の体めがけて一直線に襲いかかつた。

出久は息をのんだ。瞬間に思ったのだ。殺される、勝己が殺されてしまう、と。

「やめ!!」

相澤の強い制止の声がなかつたら、出久は間違いなく勝己を助ける

ために飛び出していただろう。それほどに転校生の攻撃は鋭く、気迫に満ちていたのだ。相澤が声を上げた時、転校生の黒い爪は勝己の全身をビルの壁に縫い止めるようにして突き刺さっていた。小指の爪は腰のすぐ横、薬指と中指は脇、親指は太股、そして人差し指は交差して首を固定している。少しでも身じろぎすればすれすれに突き刺さった爪の鋭い断面が体に食い込み無傷では済まなくなる、まさにぎりぎりの箇所に、転校生は的確に自らの得物を穿つたのだ。これにはさしもの勝己も身動きひとつできず、顔を思い切り歪めて歯噛みするしかなかつた。

「爆豪、身動きとれないな？ ……一ノ瀬の勝ちだ」

## 第2章・対人戦闘訓練⑥

相澤は静かにそう告げると、片手をあげて試合の終了を宣言した。しかし、声を上げる者はいない。転校生の闘いぶりに圧倒され、声を出すのすらばかられたからだ。

当の転校生はというと、汗すらない涼しい顔で息をひとつつき、勝己を縫い止めていた十本の爪をずるりと引き抜いた。支えを失った勝己の体はめり込んでいたビルの壁から剥がれ、べしやりと膝から地に落ちる。爪についた砂埃を息で吹き飛ばしながら転校生は、驚きと怒りと悔しさで全身を小刻みに震わせる勝己を横目で見やり、柔らかく微笑みながら言つた。

「やりすぎた？　でも、俺は忠告したからな」

それは揶揄つているのでも、嘲つているのでもない、ただ厳然と事実を突きつけるある意味もつとも冷酷な言葉だつた。自分はお前より強い。だから忠告してやつたのだ、と。

勝己はいよいよ憤りと悔しさとを劣等感とを抑えきれず爆発してしまいそうだったが、それでも対戦中のように怒鳴り散らすようなことはしなかった。負けは負け、どれだけ悔しかろうと感情をさらけ出せば、尚更惨めさが増すということが分かつていたからだ。その代わりとばかりに、下唇を皮が破けて血が滲みそうなほどに噛みしめ、ぎらぎらと光る橙色の目で転校生をねめつける。だが、それでも転校生がその涼やかな表情を崩すことはなかつた。

へたり込んでいる勝己に向かつてペコリと一礼し、クラスメイト達の方に視線を向ける。その赤色の目が優しく緩み、年相応の照れるようなあどけない笑顔が形作られると、声も出せずにいた1ーAの生徒達の緊張が一気に解けた。顔を見合わせ苦笑いをしながら、転校

生の闘いぶりについて口々に感想を交わし始める。

「や、やつべ～……」

「何……何つーかもう……やべーな」

「あの爆豪が手も足も出ないなんて……」

「え、まじで何者？ 滅茶苦茶強エじやんよ」

「またチートが一人増えた……」

とにかく言葉が出てこない者、戦闘に長けた勝己があつさり負けたことに恐怖を感じる者、更なる実力者が現れたことに絶望する者。その反応は様々だが、皆転校生の闘いぶりを畏れているという点では一致していた。先ほどと同じように転校生に声をかけたり質問したりしているが、向ける視線が試合の前と後ではまったく違っている。好奇に晒され、どこかお客様扱いを受けていた転校生は、勝己との闘いで完全に1－Aのクラスメイトとして迎え入れられたようだつた。

転校生を囲むクラスメイトの輪をすり抜け、出久はビルの壁の前でへたり込んでいる勝己の元に向かう。怪我をしているのか、それとも悔しさを噛み殺しているのかは判断がつかないが、どちらにしろ出久には勝己を放つておくことができなかつた。おそるおそる顔をのぞき込み、手を差し出す。

「か、かつちゃん。だいじょ……」

「触んなクソが!!」

しかしその差し伸べた手は、勝己の手によつてこれでもかと乱暴に振り払われてしまつた。ぞんざいに立ち上がると、憤怒のオーラを全身に纏いながらずかずかと立ち去つていく。出久は払われた行き場のない手を持て余しながら、その後ろ姿を見送ることしかできなかつた。講評を始める、という相澤の声がどこか遠くに聞こえる。

……転校生の闘いには、見る者の感情の琴線にふれるような何かがあつた。でもその「何か」の正体が掴めず、出久は相澤の授業の講評を聞きながら、先の試合ができるだけ克明に回想してみた。でもやはりその正体は分からずに、ただ転校生の背負う真黒い翼を見た時の、寒気にも似た違和感が名残のように肩口に張り付くだけだった。

### 第3章・秘密を知る者①

授業が終わり、休憩時間。教室に戻ろうとする出久の背中に転校生が声をかけた。

「緑谷。ちょっとといいか」

「あ、う、うん！」

どもりながらも返事をした出久は、演習場と校舎をつなぐ通路の端にいる転校生の元へ駆け寄った。先ほどの戦闘の記憶が脳裏に翻り、妙に手が汗ばんでしまうのをズボンの裾で拭う。

「改めてさつき、ありがとな。緑谷が忠告してくれたおかげで何とか勝てたよ」

転校生はそう言うと、にこりと優しく微笑み手を差し出した。先ほど戦闘で纏っていた壮絶な気迫はもうすっかりなりをひそめ、柔和な雰囲気が全身からあふれ出ている。

「い、いやいやいや！ そんなお礼を言われるようなことしてないよ！ 一ノ瀬くん、すつごく強かつたし、僕の忠告なんてなくても全然……むしろ、余計なお世話だつたかも。ごめん」

差し出された転校生の手を握り握手を交わしながら、段々と卑屈になっていく出久。そうだ。自分の忠告なんてなくとも転校生は難なく勝己を打ち負かしていただろう。何しろあれだけ強いのだから。

転校生の個性。伸縮自在の爪と翼。個性 자체も汎用性が高く使い勝手が良さそうだったが、何より所持者自身の立ち回り方が半端でなく優れていた。勝己の動き・個性・体の位置・周りの状況の把握力、急

所への的確かつ最小限の攻撃、先手を打たれたり奇策を講じられても動じない精神力、相手の弱みを見極め的確に迎撃する対応力、個性の汎用性を最大限に生かした立ち回り。すべての力が自分より一回りも二回りも上のレベルで、正直見物する側としては今までになく収穫の多い闘いぶりだった。だからこそますます勝己の暴力性の忠告など、完全に要らぬ世話だったと感じ羞恥心が膨らんでいつてしまう。

「そんな、謝らないでくれよ。ほら、俺、転校してきたばかりだし。皆遠慮してくれるんじやないかとか、甘えてた所あつたから。緑谷が忠告に来てくれて気が引き締まつたんだ。だからほんと、ありがとう」

転校生は慌てたように両手を顔の前で振り、出久をフォローした。その様子はいかにも気遣わしげで、出久は「いやいやいや……」と控えめになりつつもやはり彼は優しい人だと再認識する。

……だからこそあの、戦闘時に発する刺すような気迫を異様に感じてしまうのかも知れない、とも思つた。

「あ、そうだ。もつと大事なこと。言つておかなきやいけないんだつた」

転校生は今思い出した、という風に手を口に当てて言つた。今朝会つたばかりで「大事なこと」と言われてもあまり見当がつかず、学校関係の質問だろうかと思い「大事なこと? 何かな?」と聞き返す。

しかしその後に転校生が続けたのは、出久が全く予想だにしていなかつた、予想もしえないような言葉だった。

「ワン・フォー・オールの使い方には気をつけた方がいいぞ。まだものにできぬみたいだし。ビビつてずっと使わないのもあれだけど、体を酷使して爆弾作つたら、ヒーローになるどころの話じやくなつ

ちやうど

### 第3章・秘密を知る者②

転校生は何でもないことのよう言い放つたが、出久はその言葉の意味を飲み込むまでしばらく時間がかかった。それほどまでに衝撃的な台詞だったのだ。

ワン・フォー・オール。それは出久がN.O. 1ヒーロー・オールマイトイに認められ授けられた唯一無二の個性だ。個性がこの世に発現してより聖火のごとく受け継がれ、ひとたび手に入れれば何人をも寄せつけない超人的なパワーを發揮することができる。しかし器である肉体が十分に仕上がるまではその個性を受け継いだ出久は、ひとつたびワン・フォー・オールを使えばたちまちその部位が血を噴いて壊れてしまう、まさに諸刃の剣を抱えたような状態でスタートラインに立つことになった。今でもその個性使用による肉体の損傷は解決することができるず、げんに今日の試合では万物創造の個性を持つ八百万と対戦したが、「被害を最小限に」という相澤の言葉に必要以上に縛られ一度も個性を使わずに引き分けで終わってしまった。

いずれにせよ、ワン・フォー・オールが「他人に譲渡する個性」だということ、オールマイイトがそれを出久に譲渡したことは、当事者であるオールマイイトと出久を始めごくごく一部の人間しか知らない極秘事項だ。

その門外秘のワン・フォー・オールを、転校生は出久の個性だと言った。誰にも言つていはないはずの、オールマイイトと自分しか知らないはずのことを今、口にしたのだ。そう理解した瞬間、出久は頭のてっぺんから一気に血の気が失われていくのを感じた。心臓が妙に強く脈を打ち始め、普段どおりに呼吸することが難しくなってくる。

「な、ど、いや、ぼ、ぼく、え・・・・・・？」

取り繕うこともできず冷や汗を垂らして狼狽える出久にしかし、転校生は動じることもなく安心させるように柔らかく微笑んだ。

「隠さなくたつていいよ、全部知ってるから。お前がオールマイトの後継者だつてことも。ワン・フォー・オールのことも」

聞き間違いなどではなかつた。やはり転校生は出久の秘密を知っている。口ぶりから察するに、おそらくワン・フォー・オールの秘密も。なぜ知っているかなどとても見当がつかないが、それよりもどう振る舞つていいものか、知つているならと開き直ればいいのか、何のことだととぼければいいのか、それすらも分からずに出久は唇を震わせることしかできない。血の気を失い冷たくなっていく頭の中で、ぐるぐるとコーヒーのミルクのように考えをかき混ぜる。

(どういうことなんだ？ オールマイトは一部の人間以外はオール・フォー・ワンの秘密を知らないって言つてた。一ノ瀬くんがその一人だつていうのか？ どう見ても高校生にしか見えない彼が？ いつたいオールマイトとどういう関係にあるつて言うんだ？ いや仮にそうだとしても、そんな重要人物が雄英に転校してきてるのに、オールマイトが僕に何も言わないなんてことがあるはずない。ならどうして一ノ瀬くんは……)

考えれば考えるほどどつぼにはまり、次に言うべき言葉が出てこなくなる。小刻みに震える両の手指をすりあわせながら、出久はやつとのことで口を開いた。

「どうして……？ き、きみが、何を知つてるつて……」

喉がからからに渴いているせいひどく掠れた、質問にもなつていない質問にしかし、転校生は聞き返すようなことはしなかつた。まる

で出久がそうして狼狽えるのを予測していたかのように、少し申し訳なさそうに微笑む。

「最初は黙つておいた方が良いと思つたんだ。でも、ワン・フォー・オールの後継者っていう重い運命を背負つたお前に、事を荒立てたくないからって何も言わずにいるのは失礼だと思つて。だから、これだけは言つておくよ」

転校生はそう言つて、自分の胸に手を当てた。黒く尖つた爪がわずかに体操服に食い込み、皺を作る。

「俺はすべて知つている。お前が隠していることで、何か困つたことがあつたら俺に頼るといいよ。力になれるかどうかは分からぬけど、話くらいは聞いてあげられるから」

その言葉が何を意味しているのか、出久は真意をはかりかねた。けれどとても優しい言葉だと、それだけは思つた。極限まで混乱しているこの状況で抱くような感想ではないはずなのに、ひどく困つたときに「大丈夫？」と肩を叩かれたような、そんな気持ちになつたのだ。

「じゃあ改めて、これからもよろしくな。俺、先に戻つてるから」

転校生はそれだけ言うと、ひらりと手を振つて身を翻した。出久はそれに応えることもできないまま、ただ立ち尽くしてその背中を見送ることしかできなかつた。

廊下の床には、転校生が残していく黒い羽がひとつ、何かを暗示するように出久の足下に寄り添つていた。

## 第4章・懷疑①

「一ノ瀬」

放課後。職員室の出入り口のそばに立つて待っていた翔に、相澤が声をかける。

「待たせたな。こつちだ」

「はい」

相澤が職員室の近くの階段の所まで促すと、翔もおとなしくそれに続いた。転校初日ということもあり、授業が全て終わったら職員室に来るようなど言いつけてあつたのだ。

「今日はどうだつた」

「はい、皆とても気さくで優しくて、安心しました。うまくやつていけそうです。ありがとうございます」

「そうか、そりや良かつた」

相澤の問いに、心の底から安心した、という風に表情を綻ばせる翔。相澤の胸がちくりと少し痛んだ。これから自分は、この無垢な生徒に少々手酷い質問をしなくてはならない。

「お前、戦い方は誰に教わつた」

「え？」

予想外の質問に、翔は驚いて目を丸くした。その視線が何かから逃げるように少し、ほんの少しだけひらりとさまよう。その僅かな動搖を相澤は見逃さなかつた。

「戦い方ですか？……もしかして今日の対人戦闘の授業、何か問題がありました？」

「問題か。ないな、全く。今日のお前の立ち回りは見事だった。何も問題がない、ということが問題とも言えるな。ある意味では」

質問の意図が分からぬ、という風に眉をひそめる翔。だが相澤の視線はひどく落ち着き払つていて揺らがない。

「俺はあまり回りくどい言い方は好きじゃないんだ。だから单刀直入に聞く」

相澤はゆっくりと腕を組むと、罪状を言い渡すようなはつきりとした声で言つた。

「お前、『実戦経験』があるな？ それも相当の。でなければまだ高校生になつて間もない子どもが、あんな『慣れた』戦い方ができるはずがない」

翔の顔に明らかな狼狽えの色が浮かんだ。先ほどは出久を意味深な発言で戸惑わせた翔だつたが、今は完全に攻められる側に回つてしまつた。何とか取り繕うと反論しようとするが、すでに動搖で喉が震えている。

「な、何言つてるんですか先生、俺、」

「お前を責めてるんじゃない。俺はお前に戦い方を教えたのが誰なのか知りたいだけだ。年端もいかない子どもをこんな立派な戦士に鍛え上げた奴と、その目的をな」

教師らしい優しく諭すような問いつめをする相澤だが、翔の目に浮かぶ怯えのような色はみるみる濃くなつていく。先ほどまで凜とした態度で、高校生らしからぬ大人びた言動をしていた少年が、まるで

虐待を受けている子どものように小さく身を縮める様を見て、相澤は眉をひそめた。これでは、まるで――。

「あ～ら、翔。どこ行つてたんだよお前。探したんだぞお」

突如、この場にそぐわない間の伸びた声が廊下に響いた。翔の肩からするりと腕が回り、体重をかけられた翔の身体が斜めに傾く。相澤は僅かに目をみはり、翔の背後に突如現れた人物を見つめた。

「教室に行つてもいねーもんだから、職員室まで来ちゃつたよ。こおんなところで、先生と何のお話してたんだあ？」

## 第4章・懷疑②

「な、風人……!?」

翔が振り向き、驚いたように声を上げる。そこにいたのはよれよれの白衣を身に纏つた男だつた。ひょろりと小枝のような心許ない体つきで、身長は翔と同じか少し高いくらいだ。年の頃は相当若く見えるが、いかにも力の入っていない寛いだ所作はそれなりに年を食っているようでもある。栗色の髪は工作用のはさみで切つたのかと思うほど不揃いなざんばら髪で、少し赤みがかつた紅茶色の瞳は弧を描き妙にいやついているように見える。

奇妙な風体の人物が突如乱入したことに最初は驚いた相澤だつたが、すぐに目の力を緩めて息をついた。それが既に見知った人物だつたからだ。

「何してんだお前！ 今日は寝てろつて言つただろ！」

「おいおい、その言い方はねえだろ。俺一応お前の保護者だぜえ？ 転校初日につつがなく学校生活を過ごせたのか、見に来てやつたつてのによお」

今日クラスメートたちに接していたのとは打つて変わり、声を荒らげて叱咤する翔と、それを軟派な態度で受け流す白衣の男。相澤は直感を得た。この幼い優秀な戦士を育て上げたのはこの男だ、と。

「……白銀院長、どうも」

「あア、相澤センセー。どくもお。ど一つしても気になつちやつて様子を見に来たんですけど、翔はどんな感じでしたかねえ？」

「ええ」

相澤の呼びかけに、男——もとい、白銀は姿勢を正すこともなくへ

らりと笑つて応じた。翔の様子を尋ねる質問に、僅かに目を伏せ答える。

「……そのことでお話が」

「へえ。んふふ。お前何したの？」

相澤の意味深な態度にも白銀は全く動じない。翔の身体に体重を預けたまま、肩に頸を乗せてこてりと首を傾げる。答えようもない質問に、翔は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「……何もしてない。ていうか帰れ、まだからだ本調子じやないんだろうが」

「もうへーきだつつの。てーかお前は俺を甘やかしすぎなんだよお、ダメになっちゃうだろお」

何がおかしいのか終始へらへらと笑いっぱなしの白銀は、そこでもうやくべつたりとくつついていた翔から離れた。首だけ振り向き、ひらりと手を振る。

「つーわけで、俺はセンセーとお話していくから。お前は帰れ

「でも……」

「翔」

尚も言い募ろうとした翔に、白衣に包まれた腕が伸びた。翔の背中に回り込んだ腕はその両肩を抱き、まだ華奢さの抜けない薄い身体を引き寄せる。額と額をぴつたりとつき合わせ、翔の驚き戦慄いた瞳を白銀の紅茶色の瞳が無遠慮にのぞき込む。

「いい子だから。な？」

「……はい」

先ほどの軟派な声が嘘のように、低く胸の底に響くような声で宥める白銀。途端、翔は口を噤み、小さく返事をしておとなしく引き下がつた。相澤にペコリと頭を下げると、逃げるよう身を翻す。

「今日はカレーが食べたいから作つといてくれよなあ」

「ふざけんな一昨日もカレーだつたろうが！」

「えへへ」

翔の怒つたような返答に、白銀は不満そうに声を漏らしたが引き留めることはなかつた。足早にその場を去つていく翔の背中を見送り、相澤の方に向き直る。

「で、センセー。お話つて何です？」

「……あちらの応接室で」

応接室へと案内しながら、相澤はこの白銀という男をひどく警戒していた。いや、初めて会つた時から胡散臭い男だとは思つていたのだ。この、風体もだらしなく、常に含みのある笑みを浮かべ、人を勘定するようないやらしい視線を投げかけてくる男が転校生の保護者を名乗つた時は、何の冗談だと思ったものだ。

白銀凪人。都立孤児院『アザミの家』の院長。一ノ瀬翔の保護者。

そして、おそらくは、転校生を優秀な戦士に育て上げ、戦闘技術を叩き込んだ男。

一端の孤児院長がそんな真似をするには、何か並々ならぬ理由があるはずだ。今から相澤は、それを炙り出さなくてはならない。

## 第5章・教師と院長①

応接室で緑茶を出されるなり、白銀は声を上げた。

「あ、砂糖もらつていいです？」

「……これ、緑茶ですけど」

「緑茶にも砂糖入れるんですよ、私。渋いの苦手でねえ」

白銀はへらへらと笑いながら、緑茶にコーヒー用のステイック砂糖を入れ始めた。それも、テーブルに備え付けられたそれらがなくなるほど勢いで。たっぷりの砂糖を吸い黄色くなつた緑茶を美味そうに啜る目の前の男を見て、相澤は思わず目を眇める。

湯飲みをテーブルに置くと、ようやく人心地ついたとばかりに白銀は口を開いた。

「翔は世話焼きで優しい性格なんですけどねえ、正義感が強いもんで、首を突っ込みすぎて事を大きくしてしまうタチでして。何か問題を起こしたなら謝らせ——」

「一ノ瀬に戦闘技術を教えたのはあなたですか」

相澤の話を遮るような質問に、白銀は一瞬目を見開いて相澤を見た。しかしすぐに察した、というように片眉を上げ、再び湯飲みを手に取り先を促す。こちらの話を聞く気はあるようだ。ならば遠回りな言い方はせず、单刀直入に切り込まなければ。

「一ノ瀬の対人戦闘を今日初めて見ました。非の打ちどころのない優秀な戦い方だつた。が、優秀すぎる。転入試験は対人ではなかつたので気づきませんでしたが……あれはおよそ高校生の戦い方ではありません」

相澤はそこで一呼吸おいた。今日の対人戦闘演習の記憶を掘り起  
こしながら、言葉を選ぶ。

「あれは経験者の戦い方です。実際に命を狙われ、危険な敵と対峙し  
たことがある者の中

そう、今日の転校生の戦い方を見て、相澤が怖気のように感じとつ  
た違和感の正体はまさしくそれだつた。

——転校生くらいの歳頃の子どもの戦い方として、最大の特徴と言  
えるのは「躊躇」と「迷い」だ。この頃のまつとうな子どもは、例え  
どただけ身体能力や個性が長けていても、自分を本氣で害そうとして  
くる人間と実際に対峙した経験はまずない。スポーツや訓練のよう  
にあらかじめルールに守られた土俵で本氣で闘い合うことはできて  
も、ルールも何もない、負ければ己の命をも差し出さなければならな  
いような状況になど、このご時世に早々追い込まれることはないから  
だ。

そこに突然対人戦闘の演習など取り入れれば、大体は自らの個性で  
他人を傷つけることに二の足を踏む。どこまで本気を出していいの  
か。自分の個性を相手にどう使えばいいのか。どの程度の攻撃でど  
の程度の損傷が加えられるのか。勿論度が過ぎれば相手に大怪我を  
負わせてしまうので、ほとんどの場合迷い、躊躇い、やがて「手加減」  
することを覚える。

それは常に最小限の被害で事態を押しとどめなければならぬ  
ヒーローとしてはけして悪くはない傾向だが、度を超すと敵一人まと  
もに捕まえられないへっぴり腰のヒーローが生まれてしまうことにもなるので、その辺りの調整をするのがヒーロー育成に携わる教師と  
しては重要な仕事になつてくる。

だが、転校生の動きにはその、全ての子どもが持つていてるべき「迷い」や「躊躇」が欠片もなかつた。攻撃による損傷の程度、力加減、相手の動きや反撃の仕方を熟知していなければ、あのような迷いのない電光石火の動きはできない。逡巡する間がない分ほかの生徒より一段速く動けるのは、実は異常なことなのだ。

それは本来、これより先の職業体験なりインターんなりで少しずつ身につけていくべきもの。幼少からヒーローになるためのエリートコースをひた走っていたならまだしも、両親を亡くし孤児院に身を寄せている天涯孤独の転校生が、あのような「経験者」の闘いぶりを披露できる所以はないのだ。

それができるとするとならば。彼が身を寄せる孤児院『アザミの家』の院長、白銀凪人その人の仕業に他ならない。いたいけな子どもをそのように訓練する理由など考えたくもないが、何か後ろ暗い理由であることには相違ない。ここでそれを暴かなければ、と相澤は膝に置いた拳に力を込める。

「もう一度質問します。一ノ瀬に戦い方を教えたのはあなたですね」

それはもはや質問ですらなく、ほぼ決定している事項の確認のようなものだつた。それほどの確信を持つて相澤は言葉を発したのだ。着席してからいくばくもない詰問だ、相手は必ずぼろを出してくるだろう。そうなつたら教師として然るべき対応をしなければと、相手の出方を慎重にうかがう。

白銀は涼しい顔で砂糖入り緑茶——もとい緑茶を吸つた砂糖を啜つていたが、沈黙が訪れると淀みない所作で湯飲みを置いた。少し濡れた薄い唇が、筆で描いたような細い三日月の形をとる。

「いやア、お見事！」

白銀は高らかにそう言うと、胸の前でぱんぱんと数度手を打つた。突然身に覚えのない拍手を送られ呆気にとられる相澤の表情に、白銀はにんまりと笑みを深める。

「なあらほど、たつた数分かそこらであれの本質を見抜いたというわけですね！　本当に素晴らしい審理眼だ。さすが雄英の教師を務めていらっしゃるだけのことはある」

詰問を意にも介さず、心底愉快そうに振る舞う白銀を見て、相澤は思い切り顔を歪めた。仮にも生徒の保護者の前でして良いような表情ではけしてなかつたが、それでもそうせずにはいられなかつた。まさかとは思うが、この男。

「……どういう意味ですか。一ノ瀬を使って私を試したと？」  
「ははっ、まさしくそういうことになりますねえ！　あれの鍛錬の度合いを見抜けないような益暗ヒーローが担任なら、わざわざ雄英に入

れるることもないわけですし」

やはりそうだった。この男は相澤が転校生の戦い方に疑問を持ち、自らを詰問してくることを最初から予想していたのだ。いや、むしろそれを待っていたとすら言えるだろう。相澤は試されたのだ。転校生の戦い方の違和に気づけるか、気づけないかを。

だがなぜそんな真似を。相澤が疑問を口にするまでもなく、目の前の男はゆつたりと足を組み、静かに話し始めた。

「あれは……翔は、違法研究所から救い出した子どもです。個性を違法に研究する、畜生にも劣る人間どもの欲望が渦巻く場所からね」

違法研究所。相澤はその言葉を脳内で反芻した。聞き覚えのある言葉だ。最近ではほとんど聞かれなくなつたが、十数年前、それこそ相澤が中高生だつた頃には頻繁に耳にした言葉だ。

いぶかしむ相澤に、白銀は白衣の内ポケットから一枚の紙を取り出した。サイズを見るに、名刺のようだ。

「申し遅れました。私、防衛大臣直属のエージェントグループ『Save』所属、『未成年個性事件特別対策室被害児保護課』の5等級役員、白亜凪人でございます」

ひどく勿体ぶりながら差し出された名刺を受け取り、相澤は視線を走らせる。そこには印刷された黒い文字で目の前の男の身分が事細かく記されていた。

都立特別孤児院  
『アザミの家』  
院長  
白銀凪人

相澤は目を疑つた。Save。政府子飼いの超法規的エージェント集団。凶悪敵集団へのスパイ活動、政府要人の身辺保護、脱走死刑囚の秘密裏の捕縛等々、危険かつ後ろ暗い任務を一手に請け負う「静かな軍隊」。彼らはけして公に出ることなく、出たとしても『Save』所属であることは生涯に渡り秘匿し続ける。一人残らず希少かつ強力な個性を持ち合わせ、その戦闘能力はプロヒーローに匹敵するほどだという——というのが、世間の『Save』に対する見解、もつと言えば噂話だ。

実際のところ『Save』所属の人間は表舞台に出てくることはないから、どの話も信憑性がなく様々な憶測が好き勝手に飛び回つていいのが現状だ。中には、『Save』などという団体は存在しない、小説やドラマなんかでよくある「政府所属の秘密組織」なんていうありきたりな設定あたりが噂の出所だらうと言う者までいる。政府もその存在については一切言及していない、いわば都市伝説のたぐいのものだ。

その存在するかどうかも定かでない組織の一員であると、この男は言い張つているのだ。とてもではないが信じられず、むしろ信じてもらえると向こうが思つていることも信じられず、思わず声が漏れる。

「セーブ……まさかそんな……」

「そのまさかなんですよねえ。びっくりするのも無理ないですけど。世間じや『Save』の存在は都市伝説みたいなところありますしねえ。まあでも、火のない所に煙は立たないってヤツですよ。何事もね」

相澤の疑心をよそに、白銀はゆつたりと足を組んだまま何でもないことのように言つてのけた。その余裕綽々とした態度からは、こちらを騙そうとしているような意図は欠片も窺えない。一対一で差し向かいながらこれほど冷静でいられるのは、相当に凶太い神経を持ち合わせているのか、よほど騙しの腕が立つのか——それとも本当に真実を口にしているのか。その飄々とした態度からは予測がつかない。

「まあ實際のところ、世間で言われているほど『Save』の存在は秘匿されているわけでもないですよ。他庁の機関や民間企業に協力をあおぐことも少なくないですしねえ。私みたいな下つ端構成員なんて特に、やつてることは公務員とほぼ変わりません。都市伝説的に扱われているのはまあ、単純に仕事上の秘匿義務が資しているところが大きいでしょう。どんな仕事だって同じでしようがね、業務内容を他に漏らさないっていうのは」

白銀はしみじみといったふうに語り、小さく息をつくと、話が逸れましたねと言つて足を組み直した。

「私の身分もそうですが、うちの孤児院……『アザミの家』も特別なものでしてねえ。表向きはごく普通の孤児院ですが、實際は違法研究の犠牲となつた子どもの保護を行う特別指定を受けた孤児院なんです」

まるで隠していた宝物を披露して自慢するかのように、終始笑みを含ませながら白銀は話す。

「というのも最近、裏社会で複数の組織がそうした希少な個性を持つ子どもをさらつてきては、非人道的な研究をしたり調教したりと好き勝手やつてましてねえ。しかしその実状は表社会にはほとんど露呈しない。表向きはきちんと特許を得て、まつとうな個性の研究所をうたつてているのでね」

個性の違法研究。その言葉がどういうことを意味するのか相澤はよく知っていた。そういう研究の餌食になつた人間はほとんどが肉体的に耐えきれずに死ぬということ、よしんば生き残つたとしても、重い後遺症やP.T.S.Dでまともな生活が送れないようになることも。

……だがそんな非人道的なものが横行していたのは十数年前も前のことだ。そうした違法な個性研究への取り締まりは昨今とみに厳しくなり、最近では事件数もめつきり減つたはずだ。専用の孤児院を設けなければならぬほど多くの子どもが、違法研究の犠牲になつているとは到底思えなかつた。まして、転校生がその犠牲者の一人であるなどと言われても、俄には信じられない。

「まあ、違法研究なんて今に始まつたことじやないですかねえ。個性がこの世に発現してよりの伝統、とでも言うべきでしようか……もしかして、平和な今の世の中ではそんなものがまかり通るわけがないと思つてます？」 まあそう思うのも無理はないでしようが、実状は違うんですよえ。警察やヒーローの権限が大きくなり監視が厳しくなつた分、そここの網目を一度くぐつてしまえば最早止める者など誰もいない。網目をくぐるにはどうしたらいいか。まあ簡単に言えば収賄、汚職、ですよね。知つてます？ 昔は警察内部に、捕まえた犯罪者や保護した子どもを違法研究所や敵に売り飛ばす人材トレーダーがうじやうじやいたのを。昔ほどではないですが今もいますよ。あらうことか、仕事にあぶれ金に困つたヒーローがやつた、という事例もあります。寄生虫のように湧いてくるんですよ、ああいう連中は」

まるで相澤の心理を見透かしたように白銀は語つた。それが嘘か本当かの区別はやはりつかない。ただ揺らぎのない静かな瞳が弧を描き、栗色の髪の間からこちらを窺つてくるだけだ。

## 第5章・教師と院長④

「警察やヒーローだけじゃないですよ。そういう違法な研究所には、往々にして政府の上役が一枚噛んでいることが多いんです。個性研究は金になりますからね、おかげで敵団体も誰それ議員も皆こぞつて違法研究所に出資する。組織の上層部が絡んでいるから検挙することすら難しく、やつとこを潰してもまたすぐに新しい施設が建てられる。まさにいたちごつこというわけです」

そこまで聞いても、やはり相澤は白銀の話を信じることができなかつた。収賄や汚職が横行し、人間の命を安易に弄ぶような連中が増えている、犠牲者も増えている、そんな酷い現状をなぜ、第一線を退いたとはいえたまだ現役のヒーローである相澤が把握できていなかつたのか。そんなはずはない、全てはこの男の嘘八百だと思う気持ちが正直大半を占めている。いや、本当はそう想いたいだけなのか？

裏社会というものはどの時代にも存在する。ヒーローはその職業の性質上、比較的派手で表立った活動が主だ。もしかすると、両者の隔絶は相澤が思っている以上に深刻なものになりつつあるのかも知れない。もはや自分たちヒーローの手の届かない、ともすると知ることすらない世界で、数少ない弱者が食い物にされ殺される、そういう惨状が未だ続いているのだとしたら。ヒーローの台頭により駆逐されたはずの薄暗い世界は、実は表社会から遠ざかつただけで、今も密かに身を隠し生き続けているのだとしたら。

相澤の背中を嫌な汗が伝う。こんな風に考えてしまうのは、單なる相澤自身のヒーローとしての性か、それともこの男の道化のような語り口のせいなのか。

「翔には私が持つすべての戦闘技術を叩き込みました。あれだけ戦え

るならヒーローになるにも見劣りはしないでしよう。ですが本来の目的は、あれが敵の手に渡らないようにするためです。いたいけな子どもたちを食い物にする連中、その大元を絶たない限り、翔は常に命を狙われ続ける立場にあります。あれを安全かつ健康に育てるためには、自衛の力を身につけさせることなかつたわけです」

白銀はそこまで話すと、一段落ついたとばかりに痩せぎすの身体をソファにもたれさせた。筋張った指で再び湯飲みを手に取り、すっかり冷たくなった中身を啜る。相澤はその間微動だにせず、じりじりと脳内で思考を巡らせた。

今のは真偽のほどは分からぬ。今ここに証明するものがない以上、この男が自分で語った身分すら本当かどうか怪しいところだ。だが、転校生がなぜあれほどに熟達した闘いができるのか、その理由としては「いちおう」辻褄が合っている。ならば今の話を真実だと仮定して、その矛盾点についていくのが先決だ。

「……なぜ今になつてそのような話を。面談の時にはごく普通の孤児だとお聞きしましたが」

「今の話をして、あなたはあれを雄英に受け入れましたか？何をどう説明したところで門前払いが関の山だ。でも一度受け入れてしまつたとなれば話は別ですよね。大量除籍も辞さないあなたでも、あれだけ戦闘に長けた優秀な金の卵を早々に何の理由もなく除籍処分になんてできないでしよう。あなた風に言うと、「合理的に」判断した、ということになるんでしょうがね。どうです、ご理解いただけましたか？」

白銀は含み笑いすらしながら事もなげに答えた。相澤は絶句する。この男、本気で言っているのか。仮にも政府直属の身分であるくせに、れつきとした教育機関である雄英に騙し討ちを仕掛けるようなことをするなんて。けれどその、あまりに飘々としたいっそ潔いとすら言える態度に、どこをどう反論すればいいのか言葉に詰まる。

「……今更そんな頓狂な話を信じろと言うんですか？ 私にはあなたが自らの後ろ暗さを揉み消すために、下手な芝居を打つているようにしか見えない」

「我々の身分を証明する文書なら後日お送りしますけど。まあ、今すぐ信じろというのは無理な話でしょうねえ。私が教師だつたら絶対に信じません。こんな胡散臭い男の言うことなんてね」

「信じられない」という相澤の率直な意思表示に、白銀は否定すらせずむしろ積極的に賛同の意を示した。ことごとく予想の上をいく白銀の反応に、相澤は思わず鼻白む。

「まあ、そう言うと思いまして、相澤センセー。あなたにとつておきのサプライズを用意しておいたんですよ。あなたにこの話を信じてもらうために、特別仕様でねえ」

そう言うと、白銀は再び白衣の内ポケットに片手を差し入れ、今度は四つ折りになつた白い紙を取り出した。指と指の間に挟まつたそれをそのまま差し向けられ、相澤は用心深く受け取る。

「……これは？」

「ある隠れ家バーへの道筋です。下に書いてあるのは扉の解錠番号、その下のはその先のセキュリティチェックで入力するパスワードです。本来はここにさらに指紋と網膜認証が必要なんんですけど、センターは特別にパスワードのみで入れるよう手配しておきました。あ、番号とパスワードは1日に1回変わってしまうんで今夜中に行つてくださいね」

折り目に沿つて開いたその紙には、上半分に手書きの簡素な地図と住所、下半分には数字と、その下にアルファベットや記号を組み合わせたものが走り書きされていた。それぞれの文字がランダムに配置されているところを見ると、白銀の言うとおり何かのパスワードのようだ。

「こへ行つて何が分かると言ふんです」

相澤は眉をひそめて訊いた。たかが隠れ家バーがこんなに厳重なセキュリティを備えているということもきな臭いし、そもそも今の話の流れでなぜそんなものの居場所を教えられなければならぬのか、まったくもつて分からぬ。

「簡潔に言いましょう。これ以上話を複雑にしないためにも」

白銀はにやりと笑みを深め、手にしていた湯飲みを置いた。再び足を組み直し、だらしなくソファの背に寄りかからせていた上半身をやや前に乗り出す。

「久那夜牙は生きている」

## 第5章・教師と院長⑥

その言葉に、相澤はひゅう、と小さく息をのんだ。膝の上で握っていた手指と手指の間からどつと汗が噴き出し、掌を湿らせる。というのも、白銀が口にした言葉がまったく予想だにしていないものだからだ。まずこの男がその名を知っていることが信じられなかつたし、まして今彼が言つた言葉が真実であるとも到底思えなかつた。

生きている。

久那夜牙が。

有り得ない。その名を持つ男は既に、何年も前に死んだ。警察官だつた。家族のいない天涯孤独の身だつたため、葬儀は執り行われず合祀されたはずだ。間違いない。だから咄嗟に口について出たのは否定の言葉だつた。

「何を……バカな、」

「言つたでしよう、サプライズだつて。我々があなたに提供できるものでこれ以上のものは見つかりませんでした。数年前、事件に巻き込まれて死んだはずのあなたの友人が今も生きていると証明すれば、私の言葉が嘘ではないということも信じていただけますよね？」

「信じるも何も……あいつは死にました。もういません。生きているはずが、」

「あなたは夜牙が殺されるのを見たんですか？　その目で、直接」

淀みなく返され、相澤は返答に窮した。まるでそんなことは有り得ないとでも言うような確信を持った語り口に、僅かながら気圧された

のだ。

白銀の言葉を反芻すると、なるほど確かに自分は彼の死ぬところを見てはいない。知り合いの警察官から訃報を聞き、テレビのニュースを見て確認しただけだ。死に際どころか、最後にいつ会ったのか、どんな言葉を交わしたのかすら覚えていない。だとすると、本当に？いや、この男の「言うことを鵜呑みにしてはならない」。それが真実だと証明できるものが限り、すべてが虚妄である可能性だってあるのだ。油断してはいけない。意思に反して段々と速く脈を打つ心臓に、言い聞かせるように心中で念じる。

相澤は常に平静を保つことをモットーとしている。取り乱したところで解決することなど何一つないからだ。感情をかき乱され、正常な判断ができなくなることほど不合理なことはない。そう思つていたのに、今の相澤は間違いなく取り乱していた。元来無表情なのが幸いして動搖は顔に出づらいが、それでもこの、人の感情を翻弄することに長けている男には何もかも見透かされているに違いない。

何も言わず黙り込んだ相澤を見て、白銀は用は済んだとばかりにソファから腰を上げた。その潔さからして、最初からこの場では決断をさせないままにしておいて、相澤個人の考えにこの件の是非を委ねようと考えていたようだつた。

「そこに夜牙がいます。昔話に花でも咲かせてきてください。そうすれば私の言葉を疑うこともできなくなるはずだ」

けだるげに立ち上がつた白銀は、相澤に渡した紙を指さし念を押すように言つた。その声色は不安や迷いなど一切ない、いつも不遜ともとれるほどの余裕を含んでいた。まるでこちらは嘘などついていないのだから、気後れする必要などないのだと暗に示しているかのように。

紙を指さした手を白衣のポケットにおさめ、白銀はこの場を締めくくるように話し出す。

「相澤センセー。誤解しないでほしいんですが、私はあなたを騙そとか、貶めようとかしているわけではありませんよ。おおかた指示どおりにこの場所に赴けば、捕まるか脅されるか殺されるかすると思つていることでしょうが……よく考えてもみてください。あなたに危害を加えれば、せっかく翔が手に入れた新しい居場所はどうなるでしょうか？ 私はあれの立つ瀬がなくなるようなことはしません。絶対に」

相澤は思わず視線を上げた。先ほどまで人を揶揄うようなのらりくらりとした態度をとつていた白銀の言葉尻に、急に力がこもつたからだ。見上げた先にはあの嘲るようなにやついた顔ではなく、口を真一文字に引き結んだ真摯な表情があつた。何か強固な意思を宿す紅茶色の目は妙に据わっていて、どこか意固地になつてているような、或いは何かを盲信しているような、ひどく愚直で危なげな印象を与えている。

だが、それはほんの一瞬だつた。真摯な瞳はすぐさまにやつくように弧を描き、薄く張り付けたような笑みの奥に隠れていく。普段通りの表情を取り戻すと、白銀は素早く踵を返したと応接室の出入り口に歩いていった。その手がドアノブにかかるとも、相澤は止められない。止められるような言葉などかけられそうもなかつた。

「翔をつけ狙う畜生どもも雄英内のセキュリティを超えることはできませんし、多くの優秀なヒーローが待ち受ける場所にのこっこ入つてきたりはしないでしょう。だからあれを雄英に入れた、ということもあります。どうぞあれを立派なヒーローに育ててやつてください。花を育てるみたいに、大事に、慎重にね」

白銀は首だけで振り返りそう言い残すと、颯爽と応接室を後にして。軽やかに翻る白衣の裾がドアの向こうに消え、ぺたぺたというスリッパの足音が遠ざかり聞こえなくなつても、相澤はソファから一步も動くことができなかつた。

これからどうする。いや、どうすべきか。考えなければならないのはまずそこだが、それはそう難しい問い合わせではなく答えは既に用意されていた。そう、すなわち「報告」だ。

白銀凪人。奴の言ふことが嘘であれ真実であれ、これが相澤ひとりで判断できる案件でないことは間違ひなかつた。事は生徒に絡む問題だ。いくら一クラス丸ごと除籍処分にできるような身に余る権限を与えられているとはいえ、生徒の進退を決めるのには重い責任が伴う。周りの教師や校長に何の相談もなしに独断で決めていいということにはならないのだ。が、正直事情が複雑かつ特殊すぎて、相澤ひとりでは判断がつかないというところも大きかつた。

白銀の言ふように、政府の組織が関係しているなら尚更のことだ。できる限り今回の件を詳らかにし、校長に報告する。然る後に白銀と転校生を召集して事情を聞く、という運びになるだろう。今の相澤にできることはあまりに少ないが、だからこそ簡潔明快だ。

そう、この件を迅速に報告し、上からの指示を待つ。それが最善であり、教師として、組織の一員として成すべき行動だ。相澤は冷静だった。それが正しい判断であると思ったし、事実それは合理的な選択だつた。別に相澤でなくたつて、雄英の教師なら全員がそうしただろう。そのくらい明白な答えた。

それなのに。

### 『消太』

白銀にかき乱され、ばらばらに散らばつた思考の端で、声を聞く。静かに風ぐ海の風のような、穏やかで優しい響きをはらんだ声だ。高校生時代、ヒーローになるために日々がむしやらに学んでいた頃、相澤は毎日のようにこの声を聞いた。天涯孤独な身の上がそうさせるのか、笑ついていてもどこか泣いているような、悲しそうな表情をする男だつた。

手元の紙に視線を落とす。地図と番号、パスワードが走り書きされた紙。自分の手汗で湿り、黒い文字が少し滲み始めたのをみとめて、慌てて紙の端つこの方を持ち直す。

この紙にかかれた場所に行く選択肢など、ないはずなのに。

自分は何をしているんだろう。そう思った途端、相澤の胸中に奇妙な感情が生まれた。日々合理性を追求する彼からはおよそ生まれてくるはずもない感情だつた。

行かなくていいのか？ 本当に？

罠かも知れない。あの浮薄な白衣の男に騙されているだけなのかとも知れない。こんな紙切れ一枚で何の保証もない。私的な判断で何

かあれば責任も免れないし、危険も伴う。行くのはどう考へても得策ではないし、合理的ではない。そのはずなのに、これがあの、消えるようになんでいった旧友に続く唯一の足がかりだと思うと——紙から目が離せない。

もし、白銀の言つたことが事実だとしたら。

死んだはずの彼が、夜牙が、生きているのだとしたら。  
生きて話が、できるのだとしたら。

自分がほんとうにとるべき行動は。

『消太、ごめん。俺、ほんとうは——』

## 第6章・謎の少年①

「翔のヤツ、転校初日でカミングアウトしたって。ほんとかよ」

「凪人が言うにはマジらしい。ほら、例の、オールマイトの継承者」

「ああ……」

「やつちやつたネ！ やばい！」

「元々言う気だつたんじゃないの？ 僕はそう思つてたけど」

「だとしてもさ、初日にバラすのはまずくね？ はらはらすんよ、こつ  
ちはさ」

「まーなー。でもまあ、いざれは知ることだし……」

「遅かれ早かれ、だよね。むしろ初日に思い切つて良かつたと思うよ、  
俺は」

「ていうかそもそも、翔が自分で決めたことには口を出さないつて決  
めたでしょ。忘れたの？」

「いや忘れてねーけどさ……そいつが信頼できるかなんてわからんねー  
じやん」

「オールマイトの秘蔵っ子、ねえ」

「ヒゾウ？ 脾臓！」

「違うよ、陸。秘めるに藏で、秘藏」

「まあ何にせよ、俺たちは見極めるだけだぜ。なあ？」

「ああ。そいつが翔の隣に立つにふさわしいかどうか。俺たちにとつて重要なのは、それだけだ」

\*

「一ノ瀬、これ借りてたりーディングのノート！　ほんと助かつたう！　ありがとな！」

「いや、こんなもんでいいならいつでも貸すよ」

「え、てか待つて一ノ瀬くん書くとき鉛筆なの!?　シャーペンとか持つてないんや!？」

「ああ、うん。なんかこっちの方が使いやすくてさ」

「麗日今気づいたのかよ、一ノ瀬転校初日から鉛筆使ってたぜ」

「シャーペンだと、ほら、俺爪がとがつてるから滑っちゃうんだよね。鉛筆ならこう……いい具合に食い込むというか」

「食い込む」

一日の授業がすべて終わり、放課後。切島から受け取ったノートを

鞄にしまいつつ、お茶子と言葉を交わすのはこのクラスに転校してちょうど一週間を迎える一ノ瀬翔だ。

転校初日に突然の対人戦闘訓練という洗礼を受けたものの、1—Aの中でも指折りの戦闘力を誇る爆豪勝己を難なく打ち破り、晴れてクラスメイトの一員として認められた。転校してきてから今日まで、彼の周りに絶えず人が集まっているのがその証拠だ。まあ、もしあの訓練で負けていたとしても翔はすぐにクラスに打ち解けられていただろう、と、出久は推測する。ただでさえ、あの攻撃性の権化とも言える勝己を何の抵抗もなくすんなりと受け入れるような傑物揃いのクラスだ、穏やかで物腰の優しい彼がクラスに馴染めない理由などなかつた。

翔が転校してきて一週間——つまり、彼が出久の受け継いだN.O.1ヒーロー・オールマイティの個性、ワン・フォー・オールの秘密を知つていると出久に暴露してから、一週間。出久は翔を囮むクラスメイトの輪を遠巻きにしつつも、ずっと彼の動向を目で追い続けていた。

ごく一部の人間しか知らないはずの、ワン・フォー・オールの秘密を知る転校生。どうして彼がそれを知つているのか。そしてそれを出久に暴露した意図は何なのか。それを知りたくて、持ち前のオタクスキルを発揮してこの一週間穴のあくほど観察してはみたものの、得られた情報は皆無に等しかつた。

「一ノ瀬くん、転校してきてから間もないが、もうすっかり1—Aの一員だな！ 喜ばしいことだ！」

「う、うん……そ、うだね……」

同じクラスの生徒・飯田天哉が腕を直角にして素早く動かしながら話すのに、出久は生返事をする。翔がこのクラスに馴染むことを手放

しで喜べる位置に出久はいない。翔の素性も意図も何一つ明らかにならないこの現状では、疑心ばかりが膨らんで教室にいてもどうにも落ち着かない気分になってしまったのだつた。

## 第6章・謎の少年②

——あの対人戦闘演習の翌日。出久はオールマイトを空き教室に呼び出し、翔のことを相談した。彼がオールマイトと何らかの縁故があるのだと仮定し、何かの手がかりになればいいと彼の容姿や個性、戦闘能力なども含めて包み隠さず説明したのだ。

しかし、オールマイトから返ってきた言葉は出久の予想だにしないものだった。

「ワン・フォー・オールの秘密を知ってる生徒!? 誰それ!?」「ええ!? ご存じないんですかオールマイト!」

事の次第を聞いたオールマイトが顔を青ざめながら言うので、出久は思わず驚きの声を上げた。どう見ても未成年の翔がどうやってワン・フォー・オールの秘密を知ったのか見当さえつかなかつた出久だが、いざオールマイト本人さえ分からないと知ると、堰を切つたように疑心と不安が胸中をせめぎ合う。

「じゃあ、一ノ瀬くんは何でワン・フォー・オールの秘密を……?」「私の知らない、私の秘密を知っている人物か……うーん……」

二人そろつて向かい合い、腕組みをしながら考え込む。「聖火のごとく受け継がれてきた、人に譲渡可能な個性で、その事実はごくごく一部の人間しか知らない」という以外にワン・フォー・オールの知識がない出久には、推測できることなどさして多くはない。それでも何とか知っていることから可能性のありそうなことを考え出してみる。

オールマイトが把握していない、ワン・フォー・オールの秘密を知る少年。そこには必ず秘密を知り得た何らかのいきさつがあるはず

だ。オールマイトが信頼し、自ずから秘密を話す以外に、それを知る、方法。

『5年前……敵の襲撃で負った傷だ』

『これは世間に公表されていない。公表しないでくれと私が頼んだ』

飛び抜けた戦闘能力。好戦的にぎらつく、赤い瞳。

(まさか、)

恐ろしい考えに行き当たり、出久はすぐさまそれを頭の中から追い払おうとした。けれどその予測は妙に現実味を帯びて生々しく、振り払つても振り払つても煙のように頭の中をくゆり続ける。

「うーん……もしかしたらもしかしてだけど……うーつすら心当たりらしきものならあるかも……」

「そうなんですか!?」

ようやく解決の糸口が掴めたと思って、出久の声は格段に明るくなつた。しかし、オールマイトの表情は固く話し方も歯切れが悪い。「うん……でも、そうだとすると……うーん、これは厄介なことになつたな……」

オールマイトはさらに深く首を傾げ、何か考え込んでいるようだ。しばらくして顔を上げ、神妙な面持ちで出久を見据える。

「緑谷少年。少々きつい言い方になつてしまふが、はつきり伝えておこう。彼には当分近づかない方がいい」

「えつ」

思わず間抜けな声が出た。それがおよそ、オールマイトから発されたとは思えない言葉だつたからだ。

「何の説明もなしにこんなことを言うのは、ずるいと思われても仕方ないとと思う。だが、事はかなり複雑に絡まり合っているようだ。相澤くんも何やら、一ノ瀬少年のことでの動いているようだし……学校全体で対応すべき事案なのかも知れない」

「相澤先生が……？」

急に予想だにしない名前が出てきて、出久は戸惑つた。相澤消太。1—Aの担任教師。彼が翔のことで動くとすれば——一体そこにどんな事情があるというのだろうか。咄嗟にここ一週間の相澤の様子を思い出してみたが、特に翔だけに特別な態度をとつてているような記憶はなかった。そもそもどう。相澤は教師だ、どんな事情を抱えていようと生徒がそれと気づくような態度をとるはずがない。

「ともかく、そうなつてくると、一介の教師でしかない私が個人でできることは少ない。君自身にも関わることなのに、何も教えることができなくてすまないね……事情が動き次第、君にも必ず伝えるよ。だからそれまでは、ひとまず一ノ瀬少年とは距離を置いていてくれないか」

オールマイトは心底申し訳なさそうに眉尻を下げる、出久の肩をぽんと叩いた。大きくて肉厚な手のひらの感触。それを境に記憶は途切れ、出久は思考の海からゆっくりと浮上する。

## 第6章・謎の少年③

（オールマイトもどうしたら良いか決めあぐねてる……警戒してるんだ。でもこのままじや何も分からぬ。一ノ瀬くんが秘密を知っているわけも、それを僕に話したわけも……）

このまま状況が動くまで、手をこまねいているしかないのだろうか。言い知れぬ焦燥感に苛まれ、出久は唇を真一文字に引き結ぶ。

「緑谷くんは一ノ瀬くんとは話さないのかい？」

「うひえ!? な、なんで!?」

小首を傾げる飯田に突如質問され、不意をつかれた出久はほとんど真上に飛び上がった。

「いや、緑谷くんは一ノ瀬くんとほとんどしゃべっていないような気がしてな！ せっかく席が隣同士なのだから、もつと積極的に話しかければいいのに」

寝込みを襲われたような容赦ない指摘に、出久はこれ以上ないほどに慌てふためいた。額から冷や汗を垂らしつつ何とか言い訳をひねり出す。

「い、いやいやいや、そそそそんな……ほら！ 一ノ瀬くん人気者だから！ あんまり話しかけすぎるのも、さ、何か、疲れちゃうんじやないかって。ね、雄英に来たばかりだし、新しい生活に慣れるのも体力いるよなあ……つて思つたり……」

出久の出来合いの言い訳に、飯田はふーむと真剣に考え込みながら腕を組んだ。

「確かに緑谷くんの言うとおりだ。まだ雄英に転校してきて1週間しか経っていないものな。色々と慣れることに苦労を感じているかも知れない……よし、みんな！　あまりいつぺんに話しかけて一ノ瀬くんに心労をかけるのはやめるんだ！」

よく分からぬが、どうやら納得してくれたらしい。飯田はぶんぶんと腕を振り回しながら翔を囮む輪に近づいていく。「また委員長のシャカリキが始まつたぞ」「何だよ飯田」と、生真面目なクラス委員長を迎える声はからかっているようで温かだ。ひとまず何とか誤魔化すことができて、出久はほつと胸をなで下ろした。飯田は出久と翔の事情など全く知らないし、純粹な疑問を投げかけただけだと分かつてはいるが、それでも一瞬見透かされたのかと思つてしまつた。まつたくもつて心臓に悪い。

「別に俺は大丈夫だよ。気遣ってくれてありがとう、飯田」

飯田の闖入にしかし、翔は氣を悪くしたでもなく柔らかく微笑みながらお礼を返した。

優しい表情だ。自分が抱いている彼への疑念が、何かの妄想なんじやないかと思えてきてしまうくらいに。

『隠さなくていいよ、全部知ってるから』

そう、どこか宥めるように言つた彼の声も、あのときはひどく優しく、気遣わしく聞こえたものだ。あれが人を騙し、利用するための紛い物だったのだとしたら、彼の騙しの才能は相当のものであるということができる。

『お前が隠していることで、何か困つたことがあつたら俺に頼るとい

いよ。力になれるかどうかは分からぬけど、話くらいは聞いてあげられるから』

(だとしたらあの言葉も、嘘?)

翔が出久を貶めようとしているのなら、その可能性も十分にあるだろう。翔が少なからず危険な存在で、自分を騙そうとしているのではないかという予想は、今現在肯定される要素も否定される要素も含まず、薄ぼんやりとした不安と焦燥を孕んで出久の心の底に吹き溜まっている。

しかし、ただ待っていることしかできないこんな状況下にあっても、出久はあのときの翔の言葉が嘘だとは思えなかつた。騙すにしたところで露骨すぎるとか、あんな衝撃発言をしてこちらを警戒させるメリットがないとか、それらしい理由はいくらでも並べることができたけれど、出久はそうした理由は一切なしに、それでいてはつきりとした確信を持ちながら、翔の優しさが本物だと信じていたのだ。

躊躇いも作為も感じないまつすぐな言葉。真摯な眼差し。こちらを安心させようという心遣いのこもつた声。オール・フォー・ワンを継ごうと決めたのは出久自身だが、その秘密を一切他人に漏らしてはならないという厳重な制約は、彼にとつて少なからず重荷になつていたところではあつた。あの言葉で、表情で、知らず知らずのうちに張つていた肩肘がどれだけ軽くなつたか。あれが出久を懷柔し騙すためのものだとは、どう頑張つても疑いきることができない。

けれどこれは感情論でしかないだろう。たとえどれほどはつきりと輪郭を持った確信でも、何か絶対的な証拠がなければこの感覚は独りよがりなものでしかない。証明しなければ。彼を信じ続けたいなら、自分から証明のため動くべきだ。大人たちの対応を手をこまねいて待つてゐるのではなく。でなければ永遠に彼の真意を知ることな

どできない、そんな気が出久にはしていた。

## 第6章・謎の少年④

「みんな今日はもう用事ないんでしょー？なら一緒に帰る！駅近くにめっちゃ美味しいパン屋さんできたんだって！みんなで買って食べようよ！」

教室でひときわ滌剤とした声が上がり、出久の思考は一時中断された。声の主は1—Aクラスメイトの芦戸三奈だつた。ピンク色の肌に真っ黒な瞳というエキセントリックな配色の外見に違わず、賑やかで常にクラスの中心にいる生徒だ。

「おお～いいね！」  
「賛成！」

彼女の提案に、何人かのノリの良いクラスメイト達が間髪入れず賛同した。が、そこに険しい表情をした飯田が割り込んでくる。

「みんな！寄り道は良くないぞ！学校が終わつたら速やかに帰宅しよう！」

直角に曲げた腕をぶんぶんとロボットのように振り回しながら抗議する飯田に、芦戸がげんなりした様子で言う。

「ま～た飯田はそ～やつて水差す～」

「つかさあ、雄英の校則には放課後寄り道禁止なんて書いてねえし、ほら、交流深めるのも大事じやね？俺ら何だかんだまだ会つたばつかなんだし」

そう反論したのは同じく1—Aの生徒である上鳴電氣だ。彼は出

来合いの反論をしただけのつもりだつたのだろうが、飯田ははつとし  
たように手を顎に当て、真剣に何事かを考え出した。

「なるほど……今後クラス全体で演習をこなしていく中で、交流を深  
めておくことは確かに重要ではある……意志疎通も容易になるし、何  
より信頼関係を築く上でコミュニケーションをとれる機会は必要不  
可欠だ……」

しばらくぶつぶつと考え込んだ後、飯田はびしりと腕を上げた。肩  
から指先まで針金が通っているのかと思うほどの美しい直線だ。

「僭越だが俺も参加させてもらつていいだろうか!!」

「いえーい、おつけー！ 何かわかんないけどー！」

「前から思つてたけど飯田つてすげー言いくるめやすいよな……」

厄介者が易々と懐柔してくれたので、芦戸はひときわ高い声を上  
げて喜んだ。自分の言葉を勝手に誇大解釈された上鳴は、飯田の説得  
のしやすさに半ば呆れの表情を浮かべる。

それを後日に、切島が荷物をまとめていた翔を振り返つて言つた。

「なあ、一ノ瀬も来るだろ？ せつかくだし」

「ああ、うん。邪魔じやなければ」

「何言つてんの全然邪魔じやないよ！ 行こ行こ一緒に！」

そう元気に声をかけたのは同じく1—Aの生徒である葉隠透だ。  
一見すると女子用の制服がぴょこぴょこと飛び跳ねているようにな  
か見えないが、彼女は確かにそこに存在する。透明人間とは思えない  
ほど明朗活発で個性にあふれる生徒だ。

「緑谷くん！ これはクラスメイトとの交流を深められるまたとない

機会だ！ 用事がないならぜひ参加しよう！」

「う、うん、そうだね。じゃあ僕も少しだけ……」

至近距離からの飯田の剣幕に気圧され、出久もほとんど頷かされる形で「寄り道組」に加わった。（ちなみに切島が勝己にも声をかけていたが、「んな馴れ合いなんぞするかカスが！」と一蹴されていた。こう言つちやなんだが予想通りの反応だ。）寄り道の提案は瞬く間にクラス全体に広がり、最終的な参加人数を数えると結構な数になつた。参加するメンバーが決まると、皆ひとかたまりになつて教室を出る。わいわい騒ぎながら昇降口へと向かう様は、エリート校ながら年相応の高校生といった感じだ。

「……あれ？」

そのまま校門にさしかかった時、出久が声を上げた。

## 第6章・謎の少年⑤

「どうした、緑谷くん」

「あれ、誰だろう」

出久の指さす先には、校門の前を横切る道路があった。それを挟んで向こう側の歩道、校門の真っ正面に人がひとり立っている。

それは少年だった。体躯はすらりと高く顔立ちも大人びていて、どもすれば成人男性のようにも見えるが、グレーの七分袖のシャツに黒い半ズボン、かかとを履きつぶしたスニーカーという子どもっぽい出で立ちのせいで、見た目よりも幼く感じられる。それでも出久たちと同じか少し上の年齢だろうか。

「ほんとだー誰だろ」

「めっちゃ運動不審だな。不審者?」

「いやどう見ても違うでしょ。何か困ってる。高校生かな?」

出久の指摘で少年に気づいたクラスメイト達が、にわかにざわつきはじめた。皆の言うとおり、少年は傍目からもはつきりと分かるほどに運動不審だつた。肩をぎゅうと縮こまらせ、金色の瞳をせわしなく左右にさまよわせている。今にも泣き出しそうな悲痛な表情は、確かに不審者というよりは親を見失つて途方に暮れる迷子と言つた方がしっくりくる。何かを探しているのだろうか。

「太陽?」

不意に、すぐ後ろから声がした。出久が振り返ると、背後で翔が愕然とした表情を浮かべている。何でお前がここにいるんだ、とでも言いたげな表情を。

太陽。彼がそう言つたのだ。

少年の目が、ぞろぞろと校門へ出てきた出久の一団を視界に捉える。おそらくはその中の一人、翔の姿を。

「翔にい！」

金色の髪を振り乱し、少年が車道と歩道を区切る縁石を跨いでこちらに駆けてくる。だが少年が横切ろうとしている道路は、不幸なことに普段から車通りの多い道路だった。案の定、向こうから大型トラックが速度をつけてやってくる。だが少年は一心不乱で前方しか見ておらず、自分の身に迫り来る危険に気がついていない。

それは本当に一瞬の出来事で、校門にいたクラスメイトの誰も、動くことはおろか声を出すことすらまんならなかつた。ただ一人、翔だけがすぐ前にいた出久と飯田の肩に両手をかけ、ほとんど前のめりになりながら叫んだ。

「ばつか、こっち来るな太陽!!」

つんざくような大音声が出久の耳のすぐそばではじける。それを聞いた少年はまるで呪いにかけられたように、びくりと震えその場で立ち止まつた。次の瞬間、少年の体のまさに数センチ目前をトラックが轟音とともに通り過ぎる。

トラックは数十メートル走つた後けたたましいブレーキ音をあげて停止した。間髪入れず窓から顔を出したのは五十代くらいの男の運転手だ。クラクションさえ鳴らさなかつた自分の怠慢を棚に上げ、トラックの後方にいる少年を怒鳴りつける。

「あつぶねえだろうが!! 気をつけろ!!」

「ひ……、ごめ、ごめんなさ……」

何が起こつたのか分からずぽかんとしていた少年は怒鳴りつけられ、声にならない悲鳴をあげながらすくみ上がった。震える声で謝罪を口にしながら、へなへなどその場に座り込んでしまう。

「すみません！　すぐどきます！」

腰が抜けて道路の真ん中にへたり込む少年のもとに、翔が駆け寄る。トラックはさっさと行つてしまつたが、その後ろや反対車線の車は嫌な顔をせずに待つてくれた。

## 第6章・謎の少年⑥

「大丈夫か？ 太陽。立てるか？」

「ごめんなさい……ごめ、ごめ、なさ……」

翔が優しい声で呼びかける。しかし少年はその声が聞こえないのか、頭を抱えうずくまりながら譫言のように「ごめんなさい」を繰り返す。怒鳴りつけられたことがそんなにショックだったのだろうか。それにもしても怯え方がひどく極端に見える。

「太陽、俺だよ。分かるか？」

「ごめ……う、う、翔にい？」

「そうだよ、俺。翔だよ。大丈夫か？ どこも痛いとこない？」

翔は柔らかな声で問いかけながら、壊れ物のように少年の肩に触れた。その優しい声に凍えた恐怖心が融けだしたのか、ようやく少年は顔を上げて翔を見る。

「急に怒鳴つたりして悪かつた。ごめんな。外は車が通ってるから、今度は注意して渡ろうな」

「う、うん……ごめんなさい」

翔は少年を立ち上がりさせ、足早に雄英の校門側へ戻ってきた。あわや事故かという危機一髪の事態を目の当たりにした1—Aのクラスメイト達は、ここにしてようやく胸をなで下ろすことができた。少年が突然道路に飛び出すなんて誰も想像していなかつたので、皆の交わす声には拭いきれない緊張が色濃く残っている。

「大丈夫だつた？」

「間一髪だつたな！」

「てか何だよあの運転手。感じ悪い」

少年とともに無事に戻ってきた翔を、労いと驚きと運転手への悪口でもつて迎え入れる。

「い、一ノ瀬くん。大丈夫？」

呼びかけてしまつてから、しまつた、と出久は思つた。さつきのあわや事故かという危ない場面を目の当たりにして、彼と距離を置かなければならぬということをすつかり失念していたのだ。

「俺は大丈夫だよ。心配してくれてありがとうな」

出久の心中など何も知らないというふうに、翔は屈託なく笑つた。出久は思わず息をのむ。何か得体の知れない、激しくうねる感情が喉元までせり上がりってきて、顔が歪んでしまうのを止められなかつた。

「ていうか、その人だれ？ 一ノ瀬の知り合い？」

「兄ちゃんとか？ でも似てないな」

翔をひとしきりねぎらつた後、クラスメイト達の関心は彼の後ろで身を縮こまらせている少年の方へ傾いた。関心を向けられた少年はびくりと震えますます身を縮めるが、翔より10cm近く大きい体躯は完全に隠れきることはできない。

「あ……こいつは、なんというか……その……」

翔は後ろの少年を確認するかのように左右に視線をさまよわせ、言つた。

「……いとこなんだ。うちに居候してて。名前は西浦太陽」

嘘だ。

出久はそう直感した。なぜかは分からぬ。この一週間穴が空くかというほど翔を観察していたから、自然と観察眼が養われたのかもしない。彼のあの、視線をさまよわせる仕草が何か嘘をつくときのものだと知つていて――。

(いや、違う)

似ていたからだ。目をせわしなくうろつかせ、最終的にある一点に視線を止めて、不安や罪悪感からくる胸の痛みに、僅かに耐えるようなあの表情。あれはまるで――。

(僕だ)

「へ～そうなんだ！」

「居候つて、一緒に住んでるつてこと？」

芦戸や葉隠が無邪気に問いかける。出久が感じ取った違和感はどうやら他の誰も気づいていないようだ。

「うん。 そうなるかな」

翔は少年を背中に隠したまま、乾いた声で笑つた。そこに宿るどこかよそよそしい感じに、やはり誰も気づかない。気づいているのは出久だけだ。

「なら一ノ瀬くんの兄弟も同然だな」

「初めまして、芦戸三奈です！ 一ノ瀬のクラスメート！ えっと、太陽さん？ 私服だけど、どこか学校通つてたりするんですか？」

芦戸が翔の後ろに首を伸ばして、太陽と呼ばれた少年に澆刺と語りかけた。びくりと肩が揺れ、ひどい怯えの色をたたえた瞳がクラスメイト達を見る。「う、え、あ、あ」と吃音症のように意味のない言葉を繰り返しながら、少年は金色の瞳をくるくると所在なげにさまよわせた。胸の前で組み合わせている両手が血の氣を失い小刻みに震えている。

「あ……ごめん。 太陽はちょっと、何て言うか……」

その明らかに尋常でない反応を隠すかのように、翔は少年を振り返つて片腕を広げる。

「すごい人と話すの苦手なんだ。対人恐怖症、つてやつで。悪いんだけど、ひとりひとりゆっくり話してやってくれないかな」

対人恐怖症。その言葉が出てきた途端、好奇心満々に翔の背中にかくまわれた少年をのぞき込んでいたクラスメイト達は、海の波が引くように彼らから離れた。

「あー……なるほど」

「そうなんだ」

「オッケー、理解した」

「ごめん一ノ瀬。そうとは知らずに矢継ぎ早に話しちつた」

こういう心配りが迅速かつ自然にできるのは、さすが雄英生と言つたところなのだろうか。先ほど積極的に話しかけていた芦戸も、手を顔の前であわせて謝罪する。

翔は一瞬驚いたような顔をして、それから柔らかく口の端を綻ばせた。

「いや、芦戸は悪くないよ。むしろ気軽に話してくれたの、嬉しい。ありがとな」

翔は本当に嬉しそうだった。少なくとも、そこに嘘が含まれているようには見えない。

「さつきは急に話しかけちゃつてごめんね、太陽さん。えつと、この辺は初めて？」

「……」

再び芦戸が、今度はゆっくりとした優しい口調で話しかける。少年はうなだれながら黙っていたが、やがてちらりと芦戸に目を

やり、ほんの小さく首を動かした。

「……ん

「そつかー！ 一ノ……翔くんを迎えて来たの？」

「ん」

「すゞーい！ 偉いね！」

まるで小さい子どもに接するような碎けた言葉遣いになつてきた芦戸を、横から瀬呂がたしなめる。

「芦戸、さすがに『すゞーい』はねえだろ。子どもじゃねんだから」「あれ、そう？ えへへ、むつかしーな」

芦戸は恥ずかしそうに頬をかいだ。彼女の愛嬌たっぷりの笑みがクラスメート達に伝播し、その場の雰囲気が少し和やかになる。

そう、確かに、その金髪の少年は1—Aのクラスメート達に勝るとも劣らない立派な体格とは裏腹に、仕草が妙にあどけなく子どもじみていた。立ち振る舞いだけなら、7、8歳の子どもと言つても差し支えないくらいだ。芦戸が幼い子どもに対するような態度になつてしまつたのも無理はない。

「じゃあ俺、太陽と一緒に帰るから。ごめんな。せつかく誘つてもらつたのに、つき合えなくて」

タイミングを見計らつたようにそう切り出した翔を、止める者は誰もいなかつた。彼を追いかけてきた少年を一人にしていくわけにはいかないだろう。皆「気にしないで！」「また今度一緒に行こうぜ」と口々に別れの言葉を言い、手を振る。翔は笑つて手を振り返しながら、校門を出て右手の道を少年とともに去つていく。

その後ろ姿を、出久は見るともなく見ていて。ますます謎めいていく彼を、その秘密を、見つめれば暴けるとでも言うように、未練がましくその姿を目で追っていた。

翔は少年の背中を支えるように手を添え、顔を近づけながら何事を話していた。小声にも関わらずその内容が鮮明に聞こえたのは、或いは必然だったのかも知れない。

翔と出久。彼らの運命が絡まり合う、その前兆として。

「太陽。今日はどうした？ 何か用があつて来たんだろう？」

「翔にい。あの、あのね、桜ねえたちが……」

少年が今にも泣きそうな声でそう訴えた瞬間、翔の表情ががらりと変わっていくのを、出久は見た。愕然とした、顔の筋肉がすべて凍りついたような表情だ。

翔は歩速をはやめると、反対方向へ歩き出したクラスメート達と一緒に距離をとつた。そのまま雄英の隣に建つビルとビルの間、あるかないかの細い路地に、迷いなく滑り込んでいく。少年も押し込まれるような形ではあつたが、翔の足取りにおとなしく従つた。

それは本当に一瞬のことと、翔達が消えたのと反対方向を向き、早くも新しいパン屋の話題で盛り上がりつつているクラスメートたちが気づくべくもなかつた。気づいたのはただ一人、飽くことなく彼の姿を目で追い続けていた出久だけだ。

翔の姿が路地の奥へと消える瞬間、彼の背中に黒い翼のような影がぬらりと生えた、気がした。

——瞬間、出久の足は彼を追つて走り出していた。

「ごめん！　ちょっと僕用事を思いだしたから先帰つてて！」  
「デクくん!?」

「えー緑谷もー？　せつかく皆で行こうつて言つてんのにー！」

咄嗟にでまかせを叫んだ出久の背中に、お茶子の驚いたような声と、芦戸の文句がましい声がかぶさる。

あれは自分だ。出久自身だ。焼き切れそうなほどに熱を持つ頭の中で思う。

危険な目に遭うかもしれない。オールマイトや、他の雄英の先生にも迷惑がかかるかも知れない。出久が考えた通り、翔は雄英を（あるいはオールマイトを）狙う悪い人間で、オールマイトがかつて対峙した

敵と繋がっていて、だからワン・フォー・オールのことも知つていて、こちらを混乱させ判断力を鈍らせるために、出久にあんなことを言ったのかも知れない。その可能性は十分にあつた。だからこそオールマイトは、生徒に漏らしてはいけないような情報を出久に話してまで、彼のことを見告してくれたに違いないのだ。

分かつてゐる。待つべきだ。それが最善なんだ。本当は。それでも。

(何か困つたことがあつたら、俺に頼るといいよ)

あの言葉が嘘だとは、やつぱり、思えない。

少なくとも、あのときの翔は、秘密を抱える出久を気遣つて、出久の重荷を少しでも軽くしたいと思つて、声をかけてくれたのだと出久は確信していた。根拠なんてない。ないなら今から作ればいいとさえ思つた。彼を信じたい、そのために彼が何者であるかを確かめたいという思いが、胸をいっぱいにして喉元までこみ上げてくる。その感覚は出久が、誰かにピンチが訪れたとなれば後先も外聞も一も二もなく飛び出してしまつて、あの抗いがたい衝動に似ていた。

どうして翔に対してもここまで思いを抱くのか、出久には分からない。ただ、彼と自分は似通つたものを抱えているという感覚はあつた。これもまた主観的で、独りよがりなものでしかないが。

……だからこそ。

(一ノ瀬くんが本当に悪い人かどうか、他でもない、僕が、見極めなきやいけないんだ。

僕は、ワン・フォー・オールを受け継いだ、オールマイトの弟子なんだから!)

そう心中で念じると、出久の足にはますます力がみなぎる。行動に踏み切ったことで、この一週間の悩みや不安にいちおうの区切りを付けられたからだろうか。この先何が起きるとも分からぬのに、頭の中が空っぽになつて冷たく冴えていくような、妙にすがすがしい気分だつた。

## 第7章・獣の住処①

人ひとり通れるか通れないかというような狭い路地をひた走る。散らばつた煙草の吸い殻を踏みこえ、茶色く濁つた液体をたたえるペットボトルを飛び越え、打ち捨てられた旧式テレビの上でまどろんでいた野良猫たちをごめんと叫びながら蹴散らして、ひたすらに奥へ奥へと走つていく。高いビルの壁に囲われた路地は、奥へと進む毎に暗くもの寂しくなつていった。

路地は左右にさらに道を分けていて、出久はそういう分かれ道に行き当たるたびに視線を巡らせたが、翔と太陽の姿は見あたらない。先ほど路地に消える翔の背中に一瞬黒い翼が生えたように見えたのを思い出し、もしやビルの屋上を伝つていったのではないかと思い当たり、そこでようやく足を止めた。今さらのように太陽の光の届かない薄暗い路地裏から上空を見仰ぐが、当然一人の姿は見えない。

そうこうするうちに、出久はもう元の場所に引き返すこともできないほどに奥へと迷い込んでしまつっていた。立ち止まつて視線を巡らすごとに新しい道が目に入り、そのどれもがそれらしい道に思えてどちらへ進んでいいのか分からなくなる。息が切れ、どくどくと心臓が血を送る音が耳のすぐ側で聞こえる。喉の奥にわずかに鉄錆のような味も滲んできた。

「ちくしょう、どこ行つたんだ……！」

切れる息で語気を荒らげながら、出久は独りごちた。これだけ探したのだ、もうこの辺りにはいないのかも知れない。半ば諦めの気持ちで、それでも目だけは翔の姿を探す。

(だつてこんな路地裏に入つていくなんて……絶対におかしい。一ノ

瀬くんはやっぱり、何か秘密を持つてる（）

そこに関しては既に、出久が今までに目にした光景がすべてを物語つっていた。全く似ていない、いとこだという少年。少年をクラスメートに紹介するとき、わずかにさまよつた視線。身を隠すように、音もなく路地裏へと姿を消したその手際。

翔には秘密がある。少なくとも、人目を気にしてこそそそと路地裏に潜り込まなければならぬような秘密が。そしておそらくそれは、彼がワン・フォー・オールについて知っている理由にも繋がつてくるはずだ。こんなところで、絶対に見逃すわけにはいかなかつた。

「あつ！」

思わず声を上げた。たつた今、出久がいる道から左手に伸びている細い路地、いや、ほとんどビルとビルの間にできた隙間のような狭いスペースに、黒い人影が見えた気がしたのだ。ほんの一瞬だつたが出久は迷いなく、そのおよそ人が通るために作られたのではないだろう空間に体を滑り込ませる。

けして大柄ではない出久が体を横にしてもほとんど余裕のない狭い空間は、しかし長くはなく、数歩カニ歩きで進んだだけで通り抜けることができそうだつた。そこから先是今までと同じようにビルの壁で囲まれてはいるものの、数人がたむろできるくらいの開けた空間になつてているようだ。日の射す方向に建つ建物があまり高くならう、今までより数段明るい。

お化け屋敷から飛び出すような気持ちで、出久は狭苦しい隙間を抜け出て広い路地に出る。だが安堵の息は吐かなかつた。吐けなかつた、と言つた方が正しい。

翔だと思って追っていた人影の正体が、翔ではなかつたからだ。

## 第7章・獣の住処②

それは30代くらいの男だつた。がつしりと筋肉のついた体に、白いタンクトップと、親の敵のようにポケットが付いたカーゴパンツ、スケート靴かと見まがうごついブーツという出で立ちだ。彫りの深い顔には眼帯がかかつていて、ただ一つの目は魚のようにぎょろりとしている。

男の背後にはもう一人、仲間とおぼしき者がこちらを正面にして立つていた（まさか一人いるとは思わなかつたが、おそらく手前の男の陰に隠れて見えなかつたのだろう）。こちらは首から下は人間、上は鷹なのか鶲なのか、とにかく大型の猛禽類で、まさに「鳥人」と形容できる風体だつた。個性の関係で、人間でない別の動物の身体的特徴を持つ人は少なからずいるが（クラスメートの蛭水梅雨なんかはその典型だ）、それを考慮してもそのひどく憔悴したようにぎらつく瞳は常人のものとは言い難かつた。はちきれんばかりに鍛え上げた肉体の上に迷彩柄のジャージを着込み、袖からは茶色い羽に覆われた手が飛び出している。

どちらとも、たつた今自分たちを追いかけている存在に気づいたといつた様子でしっかりと出久を視界に捉えていた。その咎めるような脅迫するような剣呑な視線は、明らかに一般人のそれではない。人を傷つけ恐れさせることに慣れた、おそろしい人間の雰囲気が容赦なく出久を突き刺す。

「あ？ 何だてめえ」

黙り込んでいる出久に痺れを切らしたのか、手前の眼帯男が半ば恫喝のように声をかけてきた。それでも出久は何も言えない。まさかこんな、陳腐な任侠ドラマのような状況に行き遭うなんて想像すらしていなかつたからだ。

「おい、そいつか？」

今度は鳥男が眼帯男に声をかける。眼帯男は出久から目は逸らさないまま、僅かに首だけ動かして質問に答えた。

「いや、さつきのガキじやねえ。別のガキだ」「リストに載つてた奴か？」

眼帯男は黙り込み、ただ一つだけの目でじっと出久を見つめた。何かを見定めるような不羨な視線に、出久は体が内側から石になつていくような感覚を覚える。不安と恐怖で塗りつぶされそうになる頭の中で何とか思考する。

リスト。リスト？　何だ。何のリストだ。さつきのガキ、とは誰のことだ。

影のように路地裏へ消えていく翔の姿が脳裏をかすめた。

「……いや、違え」

数秒の間をおいて、眼帯男が言った。奥にいる猛禽男の表情が酷く歪む。鳥頭なのに、その表情の変化は出久にもよくわかつた。

「はあ？　おいおい、どうすんだよ。バレねえようにやんねえと報酬出ねえんだろう？」

「わあつてるつて、騒ぐな。……問題ねえだろ、しゃべれねえようにしたらよ」

## 第7章・獣の住処③

眼帯男は低く這うような声でそう言うと、カーゴパンツにくつついた大量のポケットの一つに手を突っ込んだ。中から現れたのは鞭。黒い握り手の先に太い繩がぶら下がり、地面にとぐろを巻く。

出久の脳内がおそろしい予感で凍りつく間に、奥の鳥男も何やら得物らしきものを準備し始めた。眼帯男が出久の方へ一步を踏み出す。すると彼の握っている鞭が、びきびきと硬質な音を立てながら変異し始めた。見るからに、硬く。繩は本来の柔らかさを保ちながらも鉄のような光沢を帯び、見るだけで気持ちが陰鬱になる暗い灰色に染め抜かれていく。何の変哲もなかつた鞭は、まばたきをする間もなく凶悪に硬い鉛色の鉄鞭へと姿を変えた。

まさか。切島と同じ「硬化」の個性。自分でなく、ふれたものに適用される個性か。

頭の冷静な部分はそう瞬時に分析したが、出久がこの不穏きわまりない急展開についていけていないことに変わりはなかつた。眼帯男がそれで自分に何をするつもりなのか、考える前に思考が自動的に遮断する。これから数秒後に襲うおそろしい未来の予感に、肩口からざあつと血の氣が失われていく。

「え、ちょ、ちょ、と」

ようやく出たと思つた声はひどく掠れて素つ頓狂で、出久の内心の混乱を包み隠さず正直に表していた。だが眼帯男が聞く耳を持つ気配はない。

まずい。逃げなければ。でもどこに？　出久が横方向に逃げられないよう、男たちは少しづつ動いて位置を調節している。慣れた動き

だ。背後には今し方通ってきた道とも呼べない狭い隙間があるが、身体を横にしなければ通れないような場所で、後ろも見ずに素早く後ずさることなどできるはずがない。振り向いて飛び込むか？ 驄目だ。その間に襲いかかられてしまう。

出久は絶望とともに悟った。逃げ場はない。

男たちが近づいてくる。膨れ上がった殺意が全身を貫き出久の足を地面に縫い止める。

心臓が早鐘を打つ。後ろ頭が雪に吹き付けられたように冷たくなる。

やばい。やばいやばいやばい。  
殺される！

「悪いな、ガキ。居合わせたのが運の尽きだと思つて、おとなしく死にやがれ！」

眼帯男の声高な死刑宣告とともに、ひゆるり、と残忍な音色を奏でながら鞭がしなつた。陽光を受けた鉄鞭の先がぎらりと光り、毒蛇のような獰猛さで出久に襲いかかる。

「ひつ！」

咄嗟に身体を丸め、頭部をかばつた出久の両腕に、無意識にワン・フォー・オールの力が漲つていく。けれど放つことはできない。狭い路地。そこでワン・フォー・オールの絶大な力を使うことの恐怖。目の前の男二人に向かうであろう甚大な被害。一般人の公道での個性使用禁止。個性をひた隠す出久が背負う、様々なしがらみが無意識下でその防衛本能を絡めとり、決断力を鈍らせた。

腕の中に溜まつた力がすんでのところで踏みどまる感覺に、出久

は絶望する。何で。どうしてこんな時に。歯噛みする間に眼帯男の鞭が目の前まで迫る。鉛色の繩先が出久の頬にふれそうになる。

——その時だつた。

## 第7章・獣の住処④

突如、出久から見て右方向、ビルの壁に挟まれた路地の奥から、巨大な「何か」が弾丸のように飛び込んできた。明確な形も色も判別できないほどの凄まじいスピードで突っ込んできた「何か」は、出久に襲いかかろうとしていた男二人に横から激突し、ものすごい力で左方向へはね飛ばした。

「びぎやつ!!」  
「ぐべえ!!」

あまりに突然の、一瞬の出来事に男たちは何一つ対応できず、どちらとも無様な悲鳴を上げきりもみしながら奥のビルの壁に叩きつけられた。狭い空間に猛スピードで巨大な物体が飛び込んできたので、結構な風圧が生まれ、元々腰が引けた体勢でいた出久はバランスを崩して尻から地面に転がつた。

路地裏の湿った土が巻き上げられ、辺り一面がぼんやりと暗くなる。土埃を含んだ茶色い風が身体を後ろへ持つて行こうとするのを、出久は地面に這いつくばって耐えた。風がおさまってから、おそるおそる上半身を起こす。

まだ薄く土埃が舞う中、立っていたのは——獣だった。ぴんと立った立派な三角耳と、全身を覆う白金色の体毛、犬科だと一目で分かる面長の顔立ち。地面を踏みしめる四つ足の肢体は筋肉で覆われ、しなやかで美しい曲線を描いている。全長は出久の身長の倍があり、身幅も路地裏の幅をほとんど占領してしまうほど肉厚だ。

「お、おお、お、狼……!?」

目まぐるしく襲い来る現象を前にまったく状況把握ができない出

久は、地面に倒れ込んだままようやくそれだけ言つた。そう、それは狼だった。およそこの日本にいるとは思えない、浮き世離れした巨体を誇る、白金の狼。あれが男たちを枯れ木のように突き飛ばしたのだ。

「ちよつと、関係ない人に手エ出すのやめてくれる？」

と、巨狼の後ろで凜とした女性の声が聞こえた。小さいが研ぎ澄まされた、切れ味の抜群に良いナイフを連想させる声だ。

巨狼の脇から進み出でたのは、出久と同じ年頃の少女だつた。金色のボブカットの髪に、同じ色の瞳。頭頂部の毛は両側が元気に外ハネしていく、何かの動物の耳を思わせる。きりりとつり上がつたアーモンド形の目もどことなく獸を連想させ、傍にいる狼と雰囲気がよく似ているように思つた。トレーナーに細身のジーンズを身につけ、その立ち姿は猫のようにならぬ流麗でしなやかだ。

彼女はふんと鼻を鳴らし、向かいのビル壁に叩きつけられ未だ痛みに呻いている男たちを侮蔑の表情で見下ろした。

「あんただちみたいな雑魚敵の相手なんて、私たちで十分なんだから」獸を思わせる鋭い瞳が、へたり込んでいる出久の姿を捉えた。ぎゅっと冷たい手で心臓を掴まれたような感覚になる。少女が不思議そうに目を眇めて言う。

「誰？」君。偶然居合わせたつて感じには見えないけど

少女の視線が下に降りていく。その目でなぞられた箇所が、ナイフか何かで切り開かれたように冷たいような熱いような耐え難い感覚を帶びていくのをこらえながら、出久はただ身体をこわばらせているしかなかつた。

「それ、雄英の制服だよね。翔のクラスメート？ 尾けてきたの？」

翔。少女の口からその名前が出た瞬間、出久は思わず顔を上げた。何だろう。出久の今の仕草を見て、少女の金の瞳に何かの感情が走った。ああ、と。必ず起ることあらかじめ知っていた事象が目の前に立ち現れて、ああ、これがそうか、と合点するような。

「どつちにしろ、死にたくないれば今すぐ逃げることだね。死ぬよ」

## 第7章・獣の住処⑤

その言葉を最後に、少女の視線は出久から外れ意識も絶え絶えにうずくまつていてる二人の男に向けられた。ナイフで切り開かれ、中に詰まつた赤い組織が身体の破損を訴える熱のような痛みが、その幻覚が、急速に遠のいていく。

「クツソガキども……なめ腐りやがつて……」

地獄の底から響くような声で眼帯男が呻き、出久は目をむいた。あんな馬鹿でかい狼に猛スピードでタックルされたのだ、普通なら即気絶していくもおかしくはない。しかし男たちはビルの壁を背にし、よろつきながらも何とか立ち上がってみせたのだ。

「こつちはプロだぞ、こんな……なめやがつて……殺してやる!!」

一度途切れたはずの殺意が何倍にも膨れ上がり、路地裏を圧迫し、思わず喉からひゅうと悲鳴のような音が漏れた。その殺意は出久に向けられたものではないのに、それでも全身の骨が電撃でも受けたようびりびりと震えおののいている。手指など末端から体温が失われ、額や背中に冷たい汗が滲んでいく。それは紛れもない、出久がこの男たちに恐怖しているという証だつた。

これが悪意。これが敵。出久もヘドロ事件で敵と対峙したことがあると言えばあるが、あの時はほとんど我を失っていた。正氣でこんな、絶対的な殺意と向き合うことはきっと、今の自分の精神力ではできない。だがそんな膨大な殺意を一身に受けてなお、少女の顔には不安も恐怖も怯えも掠めることはなかつた。それどころか、男たちの途切れない殺意を嘲り、嗤い、哀れむような表情すら浮かべてみせた。

「なめる？　なめてたのはそっちでしょ。子供相手だから楽な仕事だ

と思つてたんだろうけど、お生憎様」

少女が一拍開けて言う。罪を告白するような、何かを侮蔑するような、複雑な声色で。

「私たち、ふつうの子供じやないから」

その言葉が二人の男に届いたかどうかは分からぬ。少女の言葉が終わらぬ間に、彼らは自らの殺意に突き動かされるままそれぞれ攻撃態勢をとり始めたからだ。

まず鳥男が素早く眼帯男と入れ替わつて前に出ると、白い羽に覆われた両腕を大きく広げ前方に思い切り振るつた。瞬間、男の腕から放たれた無数の羽が小さな鳥へと変じ、少女と大狼へ一斉に襲いかつた。あがが彼の個性か。

「死ねえええ!!」

鳥男の雄叫びに応えるように、濁つた目をした無数の鳥たちがピイピイとけたたましい鳴き声をあげた。凶悪なほどに鋭く尖つたくちばしを携え、狼に迫る。しかし狼は寸分の焦りも見せず、むしろゆつたりと余裕のある動作で斜め上方に跳躍した。自身の真横にあつた建物の壁に垂直に着地し、間髪入れず再び跳躍。向かい側の建物の壁に足をつけ、さらに跳躍。そうして路地の両側の建物を交互に飛び上がり、瞬く間に建物群のてっぺんへと到達した。鳥たちも狼の動きを追いかけて垂直の軌跡を描き、上へ上へと伸び上がつていく。その間に地上にいる少女は鳥たちが襲つてこない射程外へと飛びすさつた。

ひときわ高い建物の屋上に前足がかかると、狼はさらに勢いをつけて飛び上がり、中空へと身を躍らせた。筋肉に覆われたしなやかな肢体が、白金色の体毛が、沈みかけの太陽の光を受けて星のようにきらきらと輝く。

狼はそのまま上空で身を捻り、同じく上空へ飛び上がってきた無数の鳥たちと正面から対峙する格好になつた。瞬間、出久は背筋をぞくりとさせる。今気づいた。狼の金の瞳が一瞬、燃えるような憎悪と粘ついた愉悦をはらんでぎらりと光つたからだ。

殺意。圧倒的な。男たちが放つたのとはまた異質の、獰猛な、血に飢える獣が発する生々しい殺意が、暗い路地裏に電撃のように迸る。

ヴオオオオオオオオオ!!!

空気を突き震わすような凄まじい雄叫びを発しながら、狼は右足を高々と振り上げた。真っ赤な夕日にその太く巨大な爪を鈍く光らせ、体にかかる重力のままに襲い来る鳥たちと激突する。生き物の皮膚や肉など簡単に引き裂いてしまいそうな、凶惡な鋭さの嘴を一身に突き出し襲いかかつた鳥たちは——しかし、一匹たりとも狼に一矢報いることはできなかつた。

狼の身体をびつしりと覆う、鋼を細くしてよりあわせたような硬質の体毛と、振り下ろされた右足が起こす凄まじい風圧。断崖のような圧倒的な力の差を前に、鳥たちの数の暴力はまったく無力と言うほかなかつた。嘴をねじ折られるか方向を見失ってんでに飛ばされるかもしくは彼の振り下ろした暴虐な爪に八つ裂きにされるなどして、鳥男の羽から生まれた無数の鳥の筵は呆氣なく破られた。

鳥たちの猛襲をその肉体ひとつで退けた巨狼は、手近な建物の壁に斜めに着地、後ろ足で思い切り壁を蹴り、その勢いのまま直線上にいた鳥男に真っ向から襲いかかつた。ターゲットになつた鳥男は指に挟んだ羽を構え、慌てて何事かしようとしたが、遅すぎた。いや、間に合つたとしてもこの猛悪の権化と化した狼に、一矢報いることはできなかつたかも知れない。

ドオオオオン!!

「ぐげえッ!!」

再び狼の、今度はかなり高い角度から猛烈な体当たりを食らい、鳥男の上半身が背後の地面に冗談でなくめり込んだ。轟音が響き、大量の砂埃が舞う。それが晴れた後には、へこんだ地面に仰向けに倒れ伏し、額やら目尻やら口やらから血を噴きだしている、ぼろぼろの哀れな男の姿があった。手にはおそらく体当たりをされる直前に生成したのだろう、先が鋭く尖った大きな羽ペンのような武器が握られている。

「すゞい……」

出久は思わず呟いた。圧倒的な力とはこういうことを言うのだと、まざまざと見せつけられたような心地だつた。おそらくはそれなりの手練れであろう敵を前に、怖じ気付くこともなく立ち向かい、鮮やかに叩きのめしてみせる——その姿はどことなく、対人戦闘訓練の際に見た、あの翔の佇まいと似ていた。

## 第7章・獣の住処⑥

早々に戦線離脱させられた鳥男を後目に、遠くに退いていた少女のからかうような笑い声が響く。

「派手な個性だねえ。嫌いじゃないけど」

仲間が為す術なくやられ、眼帯男の顔に明らかな動搖の情が浮かんだ。脂汗を垂らしわなわなと震える男に対して、少女は汗一つかかずいつそ爽やかな微笑さえ浮かべている。

「くそ……くそ……化け物どもがああああああ!!」

敵意と殺意を滴るほどに帶びた男の絶叫。しかしそこには今までなかつた、底知れぬ力を持つ子供たちへの恐怖の念が感じ取れた。

こいつらは何だ。得体が知れない。逃げられない。殺せない。——いや、殺されてしまう！

驚愕と恐怖に絡め取られたその声は、聞きようによつては悲鳴とも受け取れた。

眼帯男は叫び散らしながら、手に持つた鉄鞭を思い切り振り上げ、少女に襲いかかつた。狼はまだ氣絶した鳥男に跨がる形で態勢を戻しきれていない。

まつたく驚くべき速さだった。狼の脇をすり抜け、左足を踏み込み、腰を限界まで右に捻つて、右手に握った鉄の鞭が放たれるまで、3秒もなかつただろう。火事場の馬鹿力というヤツか。

しかし、少女はあくまで冷静だった。おもむろにポケットに突っ込んでいた手を取り出すと、腕を伸ばして襲い来る鉄鞭の方に手のひらを差し向ける。

「私に「モノ」で攻撃するなんて、」

少女の指先が縄にふれる。と——鋭くしなつて少女を襲おうとしていた鉄鞭の動きが、ぴたりと、完全に停止した。まるで少女にふれた瞬間、石になる呪いでもかけられてしまつたかのように。中空で、振るわれた状態そのままに固まる様は、まさに「停止」と形容するしかない光景だつた。

「ちよつと正気じやないね」

個性、ちゃんと調べたの？ 少女はそう言うと、にこりと人好きのする微笑を浮かべた。爽やかな、いつそ慈悲深きすら感じる笑みだつた。

そこからの反撃はまさに電光石火だつた。彼女にふれられた鉄鞭は、停止状態から不意にふわりと上空へ浮き上がつた。妖精の粉を振りかけられたウエンディ達のような軽やかさで鞭は上昇し続け、ついには持ち手の部分が眼帯男の手からすっぽ抜けた。

「はつ？」

手をすり抜けて飛んでいく己の得物を眺め、男は素つ頓狂な声をあげる。と、瞬間、鞭の縄先がびゅるりと音を立て動いた。その先は少女ではなく——眼帯男だ。

鞭はまるで意思を持つ動物にでもなつたかのように、実になめらかに動いた。縄先でびしりと男の右こめかみを殴りつけると、返す手で左頬を叩き払う。一切の迷いも容赦もないその攻撃は、まるで獰猛な蛇が己の獲物を追いつめているかのようだつた。

こめかみと頬に打撃を受け、一瞬で二方向に頭部を吹き飛ばされた

眼帯男は、声も出せずによたよたとたたらを踏んだ。それでも何とか持ち直し、両手を突き出すようにして防御の体勢をとる。

出久は男の、両手の甲から肘にかけてを包んでいた籠手のような防具が、瞬時に鉛色に染め抜かれるのを見た。おそらく「硬化」の個性を発動したのだろう。男はまだ諦めていない。血走った目を爛々と輝かせ、確実に迎撃するつもりでいる。

それでも少女の表情はちらとも変わらなかつた。トレーナーのポケットからもう片方の手を取り出すと、指先をくるくると回し中空に螺旋を描く。するとその動きを真似るようにして、鞭がものすごい速さで眼帯男の周りを回り、両腕ごと男の上半身を縛り付けたのだ。頑丈な鉄鞭にめちゃくちゃに絡みつかれた眼帯男は、防御のために両腕を突き出した格好のまま身動きがとれなくなつた。鉄鞭は確固たる意思を持つてその場にとどまつてゐるため、絡みつかれたまま退くこともできない。自由な下半身をむやみにばたつかせたせいで、足が踊り、バランスを崩した。そのまま為す術もなく転倒する。

後頭部を激しく打ち付けた眼帯男を無表情に睥睨し、少女は空を向いたままの人差し指を素早く左から右へと振つた。瞬間、男を縛りなお余つていた鉄鞭の先がびしりと男の頬を打ち据える。先ほどの攻撃より、格段に鋭く重い一撃だつた。

「ぐうえつ！ あ……」

鞭の打ち据えた方向に頭を跳ね飛ばされ、眼帯男の喉内から勢いよく血が飛び散つた。全身から力が抜け、腕が未だ宙に浮いてゐる鉄鞭に吊られたようになる。白目をむいているのを見ると、もう起きあがつてきそうにはない。完全に気絶したようだ。

それを見届けてようやく、少女は腕をおろして息をついた。恐怖や

緊張から解放されたという感じではない、一仕事終えたと言わんばかりの安堵の感が、その獣を思わせる顔ににじみ出る。

## 第7章・獣の住処⑦

出久の方はと言うと、惚けたように少女を見つめたまま立ち上がる  
ことすらできなかつた。翔のことも含め、あまりにたくさんのが  
起こりすぎて、いよいよ脳が状況把握するのを拒絶しようとしている。  
彼らは誰で、今叩きのめされてのびてゐる男達は誰で、なぜ両者  
は戦つたのか。疑問はわいてくるのに、思考がついてこない。口が馬  
鹿みたいに半開きになつてゐるのを遠く意識する。

そのまま何気なく視線を路地の奥の方に——氣絶した鳥男とその  
上へ跨がる巨狼の方にずらした出久は、すんでのところで出そうにな  
つた声をのみこんだ。それはうすくまつた姿勢からゆつくりと身  
を起こそうとしている。その身体の下には仰向けになつて氣絶した  
鳥男がいるが、サイズからして明らかにさつきの巨大な狼ではない。

それは少年だつた。180cmくらいの、薄暗い路地裏で発光して  
いるように見えるほど明るい、金の髪の少年。少女のそれとまつたく  
同じ色だ。目は——今気づいた。片方は髪と同じ金だが、片方は灰色  
のような青色のよう、何とも名状しがたい淀んだ色をしている。見  
えているのか。よく分からぬ。

しなやかで動きやすそうな筋肉をまとつた肉体はすらりと長く、人  
間なのにどこか野生の獣を思わせる体つきだ。胸板が厚く、腹も六つ  
に割れているのに、なぜか筋肉の重さを感じさせない。とことんまで  
実践を重んじて磨き上げられた肉体といつた感じだ。

……なぜ出久にそのような彼の肉体の詳細が分かるのか。断じて  
男性の肉体を観察するのが好きというわけじゃない。確かにヒー  
ローの活動を追いかけるのは好きというか、ほとんど趣味みたいなも  
のだけれど、それとこれとは別だ。

正直あまり声を大にして言いたくはないが——まあ実際に声には出していないが、むしろ声を上げそうになつてているのを必死に抑え込んでいるというか。どういうことかと言ふとつまり——少年は全裸だつた。外に出るのなら当然身につけるべき衣服はおろか、下着すら着ていない。当然、いわゆる男性の象徴、もつとも大事な部分も丸見えだ。

しかし少年は出久の視線など露ほども気にしていない様子で立ち上がると、のんびりと伸びをしてあくびまでしてみせた。その態度があまりに堂々としていて、目をそらした方がいいのかあえて気にしない方がいいのかも分からぬ。

少年は実に気持ちよさそうな伸びを終えると、おもむろに足下に転がつている鳥男の襟首をひつつかみ、少女のいる方へずるずると引きずつていった。同じく意識のない眼帯男と背中合わせに座らせると、傍にいた少女が再び指でくるくると螺旋を描く。途端、手持ちぶさたに宙に浮いたままだつた鉄鞭が彼女の指の動きにあわせて鳥男と眼帯男の身体をぐるぐる巻きにしてしまつた。実に手際の良い拘束である。

(個性……物体操作、とか……？ オーソドックスだけどなんて強力な……)

指の動き一つで敵をのしてしまうなんて、個性ありきのこの世界でもちよつと信じられる光景ではない。彼女の魔法使いのような手際と佇まいにすっかり魅了され、出久はぐくりと生睡を飲み下した。

「うーい、いつちよあがりーっと」

二人の男の拘束が終わり、少年は人心地ついたとばかりにぐるぐると両腕を回して言つた。うわ、喋つた、と思つて少し驚く。というか、

未だ彼は当たり前のように全裸のままだが、良いのだろうか。そろそろ下着だけでも着てくれないと目のやり場に困る。

## 第7章・獣の住処⑧

出久がそう思つたところで、今まで何の言及も素振りもしなかつた少女がじとじとした目で少年を睨めつけた。

「ちよつと、いつまで全裸でいるつもり？ 戻つたらすぐに服着ろつていつも言つてるでしょ」

「服？ あー、【家】に忘れちつた」

「また？ 何回忘れたら氣が済むのよ、今日出る前にも言つたのに……ていうか、服ないなら人間に戻らないで。恥ずかしい」

「へいへい、わーつてるつて。おめーもしつこいよな、桜」

「誰のせいよ」

少年のいかにもめんどくさそうな返事に、はあ、と呆れてため息をつく少女。だが彼女のそのような態度は、当の少年には全く響いていないようだ。

「いつも通り、このまま交番まで持つてく感じでいいよな？」

「……いいけど、その姿で持つて行かないでよ」

「いやいやいや、さすがの俺もそこはわきまえてんよ？ この状態でこいつら引きずつてつたら捕まるの確実に俺じやん？」

「このまま全裸でいる癖ついたら、あんたきっとそのまま人前に出るようになるよ。きっとっていうか、確実に。絶対に。100%」

「おい！ 予言すんのやめろ！」

二人の掛け合いは何とも軽妙で、端から聞いていてもお互い気の置けない関係であることがひしひしと感じられた。それによくよく見ればこの二人、顔立ちがよく似ている。獣を思わせるアーモンド形の瞳なんか、特にそつくりだ。髪と目の色も同じだし、兄妹なのだろうか。

目前の危機が去ったせいだろうか、そうして暢気なことを考えていると、不意に少年の目がきろりとこちらを向いた。ばつちり目があつたその瞬間、少年が「うつわ!!」と大声を上げて飛びすぎる。その野性的な素早い身のこなしは、狼のそれを彷彿とさせた。

「びつづくりした!!　え!?　何!?　誰!?　不審者!?!」

「いや、どう見てもあんたの方が不審者でしょ。真っ裸だし」

出久がここにいることを全く認識していなかつたのだろう、ひどく動搖し警戒する少年に対し、少女はいたつて冷静だ。ゆつたりと腕を組んでさえいる。

「いやいやいやいやそういう問題じゃねーだろ!?　え?　誰?　何でいんの?　つかその制服、雄英?」

何かに思い当たつたらしい少年は、獣のような目をまん丸くして、人差し指で出久をズビシツと指さした。

「つてことは、お前がウワサの秘蔵つ子かよ!?　オールマイトの!!」

大声で指摘され、どきりと心臓が喉元まで跳ね上がつた。個性を使つてもいないので、初対面で出久をオールマイトと結びつける人間はまずいない。まして、秘蔵つ子だなんて。

確信した。彼らは出久の秘密を知つてゐる。翔と同じだ。少女が、翼、と少年の名前らしきものを呼ぶ。

「あつちもそろそろ終わる。彼のことは翔が来てからにしよう」

言いながらきろりと睨まれ、肩口に怖気が走る。どうしよう、逃げた方がいい? 翔の正体を見極めたくてここまで来た、それは間違い

ないが、その決意に危うくヒビが入りそうなほど恐ろしい目だったのだ。それに、翔のことをひとまずは信じることにしたとはいえ、彼が敵である可能性だって完全にはないわけではない。

翔を知っているふうの、この二人こそ、恐ろしい敵であるという可能性は？ そうだ、彼らは路地裏とはいえ、私有地ではないところで躊躇なく個性を使ってみせた。許可された場所以外での個性使用は禁止、戦闘のためとなれば尚更だ。見つかれば法律で罰せられる行為を一切の躊躇なくやつてのけ、凶悪な敵をいとも簡単に叩きのめしてしまえる人間が、本当に「善良な市民」と言えるだろうか？

しかしそれに気づいたところで、出久にはどうすることもできなかつた。ひとたび使えば身体が粉々になる超リスクーな個性で、いつたいどれだけのことができるというのだろう。この二人の戦闘の熟達ぶりからして、まず間違いなく無事で逃げ切ることはできないだろうに。

## 第7章・獣の住処⑨

「噂をすれば」

おもむろに少女が振り返り、笑みを深めた。彼女が仰ぎ見る橙色の空に、何か黒い影が飛んでいる。それはまるまるうちに大きくなり——いや、こちらに近づいてきているからそういうふうに見えるのか。それにしても凄まじいスピードだ。ぐんぐんぐん近づいてきて、あつという間に頭の先を掠めるかというほどの距離まで迫ってきて、出久は思わず「ひつ」と悲鳴を上げて両腕で頭をかばつた。

ドオオオン!!

その影は先ほどの狼の突撃に勝るとも劣らないスピードで、路地裏の奥に突っ込んだ。再び土埃が舞い、今度は何だと目を凝らす。

人だ。人が足元に転がっている何かに向かつて身を屈め、今まさに起き上がりろうとしている。灰色のジャケットに深緑のズボン。肩胛骨の内側を突き破るようにして生えているのは、鴉のそれよりも黒い、大きな翼。

振り向いた顔に灯る二つの赤い瞳が、出久を映して大きく見開かれた。

「えつ、緑谷!？」

彼は——翔は、本当に驚いたとばかりに素つ頓狂な声を上げた。出久はちらりと見えた彼の手足から、あの凶悪な黒い爪が生えているのを見た。地面や向かい合ったビルの壁に突き刺さつたそれらに、縫い止められるようにして氣絶している男の姿も。

そいつは色黒で、サングラスをかけ、ド派手な模様の入った紫色のシャツを着ている。風体は夏の海水浴場でよく見かけるナンパ男と言つた感じだが、サイズだ。身体がとにかくでかい。出久の方に足を向けて寝転がつてるのでよくは見えないが、翔の二倍は優にあります。そいつの胸の上に立つて、翔の位置がそれなりに高いことから、厚みも相当にある。普通の人間ではまずあり得ない体躯だ。個性——筋肉などの肉体部分を増強するタイプの個性だろうか。あからさまに柄の良くないその男は、四肢を投げ出し、完全に意識を失っているようだ。

誰が彼をそのような状況に至らしめたのか。答えは火を見るよりも明らかだった。

「何でこんなところに——」  
「やつぱり知り合いだつたんだ」

翔の質問が終わる前に、少女が言つた。話を遮るような言い方だったのに、彼女の語り口には長年連れ添つた伴侶に話しかけるような、実に自然な流れのようなものがあつた。

「尾けて来たんじゃない？ 翔の後を。いい趣味してるとよね」

腕組みをしたまま薄く笑む少女。その鏡のような意図の読めない視線を受け止めて、出久は顔が下向くのを止められなかつた。いい趣味。少女の声音には責めるような色は全くなかつたけれど、言葉にされると地味に良心に刺さるものがある。

「おいおい翔、こいつが例の『継承者』かよ？ おもつきし尾けて来てんじやねーか。ほんとにこいつにバラして良かつたのかよ」

少年は相も変わらず全裸のまま、無遠慮に出久を指さして言つた。

意図の透けない少女とは正反対に、少年の言葉や視線からは出久への疑心や敵意がひしひしと伝わってくる。

翔は振り返った姿勢のまま何も言わない。ばつが悪そうに下を向き、唇を噛みしめている。彼が何を思っているかはわからないが、自分もきっと同じような顔をしているだろうと出久は思った。

「ほら、聞きたいことがあるなら聞いたら？」「継承者」くん。そのために来たんでしょ？」

少女は出久を顎で示し、発言を促した。出久は翔と視線を合わせることができずに下を向く。所在なく中空に浮かんでいた両手で、ジャケットの襟のところを掴む。別に意味はない。誤魔化したいだけだ。何を誤魔化したいのかは、出久にも分からぬ。

## 第7章・獣の住処⑩

「一ノ瀬くん……」

名前を呼んでどうする。聞くんだ。ほら。疑問。疑問なら山ほどある。この少女と少年は誰？ この敵たちは？ 君たちを狙つてるのは？ だとしたらどういう目的で？ さつきの少年は、太陽くんはどこ？ どうしてこそそそと隠れるような真似を？ 実に奇妙なこの状況にして、分からることは星の数ほどある。けれどそのどれもここで聞くには場違いのような気がして、口から出る前に喉の奥で溶けてなくなってしまう。

どどのつまりは、聞く勇気が出なかつたのだ。ここまで追いかけてきておいて何とも間抜けな話だが、このような衝撃的な形で現実を突きつけられ、怖じ気づいてしまつたのだ。翔はただの高校生ではない。少なくともこうして徒党を組み、害意を持っているとは言え生身の人間を攻撃した。気絶するほどに容赦なく、あまりに熟達した戦いぶりで。

改めて、出久は恐怖を感じていた。少しは覚悟できていたはずなのに、現実はその何百倍も生々しく出久の胸を穿ち、全身をすくみ上がらせている。

「あの……個性、使つて良いの？ ここ、許可されてるわけじゃない……よね？」

結局口について出てきたのは、核心をつくようでつかない曖昧な質問だった。言葉の端々から自分の臆病さや保身ぶりが透けて見えるようで、質問した傍から嫌悪感がこみ上げてくる。

翔の方もそのような質問は予想外だつたようで、赤い瞳孔をきゅつ

と細めた。静かに息をつくと、首もとに手を突っ込み、シャツの中から何かを引っ張り出す。出てきたのは、ビニールカバーが取り付けられた名刺大のカードだった。カバーの上部に紐が通してあって、首から提げる形になっている。

「個性使用許可証。俺は……というか俺たちは、自衛目的に限り公道および無許可私有地での個性使用を許されてる」

「こせいしよう、きよかしよう」

出久は幼子のように翔の言葉を繰り返した。個性使用許可証。ここからでは遠くて読みづらいが、確かに翔が掲げているカードにはそのような文字が印刷されている。知らない単語ではない。出久を含む雄英ヒーロー科の生徒達が、2年時に受ける仮免試験に合格した際に取得できるヒーローの「仮免許」も、そういう類のものだつたはずだ。

だが翔が持つていてる許可証は当然、仮免許などではないだろう。彼は自衛目的に限り、とも言つた。いつたいどういう意味なのか。

翔は下を向いたまま、ちらりと盗み見るように出久を見た。彼も出久に勝るとも劣らず気まずさを感じているようだ。

「緑谷は、何で……」  
「知りたかつたんじょ？」

また少女が翔の発言に被せるように言つた。このままでは話が進展しないと痺れを切らしたのかも知れない。

「不安も疑いもこのままにはしておけないから、自分から行動に出た。そんなどこでしょ？ なかなかアクティブだよね。見た目は地味なのに」

軽口のように言われ、「え、や、その」と馬鹿みたいな反応しかできない。図星だ。

「お呼び立てする前に、あつちから先に来てくれた。難しく考える必要はないんじやないの、翔」

少女は翔のいる方に首を傾けて言う。翔はそれには答えず、眉根を寄せた表情のまま乗りかかっている筋肉男の胸から地面に降りた。

## 第7章・獣の住処⑪

「おい、待てよ。こんな急に……ってか、凪人に何も話してねーじやん。こいつが信じられるヤツかどうかもわからんねーし。いきなりはさすがにまずいって」

神妙に考えている様子の翔に、少年が咎めるように言つた。どうやら少女は翔に何かを促していく、少年はそれに反対しているようだ。

「翔の好きにすればいい。あなたがやめとくと言えばやめるし、連れて行くというのならそうする。私はあなたの判断に従う」

少女は唄うように言つた。彼女の金の瞳が、何か強い情念を宿して濡れたように輝きながら翔を見つめていた。恋慕などと言うには清廉すぎるその眼差しを、どう形容すればいいのだろう。崇拜、或いは、盲信か。

「おい、無責任なこと言うなよ桜！ それだからコイツが……」「来てもらおう」

少年の反論を制するようにして翔が言つた。

「これ以上疑わせたまま、不安にさせたままにしどくのは……申し訳ない。大丈夫、凪人とは話をつけてる」

強く、自らに言い聞かせるような声。翔の視線はもう下がつてはいなかつた。苦しそうにしながら、それでもまっすぐに顔を上げて出久を見ている。鮮やかな赤の瞳に灯る真摯さに、出久も自然顔を上げていた。

「ごめん。翼」

翔は傍らに立つ少年に目を向け、顔を歪めるようにして笑った。いつも困らせている相手に、例のごとく迷惑をかけるときに浮かべる、申し訳ないというような、何かを誤魔化そうとするような笑みだつた。

「謝んなつて、お前。ほんとにさ、もう……」

少年はやりきれない様子で、ぐしゃぐしゃと豊かな金の髪を手でひつかき回した。

「いーよ。どうせお前はいつも自分で決めちまうんだから。俺らが止めたつて意味なんかねえんだろ」

拗ねたようにそっぽを向いた少年に、呆れた様子で少女が言う。

「何よ、心配だから勝手なことするなつて素直に言えばいいじゃない」「だつ、なつ、ちよつ……そういう意味じゃねーよ！ 変なこと言うな桜！」

少年の慌てふためいた顔に、みるみるうちに朱がさしていく。図星をさされたのが丸わかりだ。こんな状況でなければ——ここが3人の屈強な敵が気絶してごろごろと転がっている路地裏でなくて、さらには彼が全裸でなければ——、微笑ましいとすら思っていたかも知れない。

少年が反論してこないのをみとめ、改めて翔が出久を見据えた。

「ごめん、緑谷。疑つてたんだよな、俺が敵なんじやないかつて。実を言うと、あの時は力マをかけたんだ。お前がワン・フォー・オールの次の継承者だつて確証が、こつちにはなかつたから……でも、もつと

うまいカマのかけ方はあったよな。あんなド直球で核心つかれて、不安にならないわけないよな。危険な目にも遭わせて。本当にごめん」

自嘲するような笑みを浮かべられ、出久は反応に困った。何しろ出久自身、翔に必要以上に関わるなどオールマイトに忠告されていたわけで、これは完全に自分の独断専行だ。まさか謝られるような展開になるとは思いも寄らなかつた。

「いや、その、僕は……」

何と返したらいいものか。「いいよ」と言うのも違うし、「気にしないで」と言うのもおかしいような?返答に窮して慌てる出久を見て、翔の笑みがほんの少し柔らかくなる。

「でも、俺が、俺たちがどうしてワン・フォー・オールの秘密を知ったのかって話になると、ちよつとややこしくて。いや……ややこしいんじゃないな。怖いんだ。単純に。知られるのが怖くて、覚悟が……何しろ、信じてもらえるかどうかも分からぬような話だから」

怖い。

彼の放つたその言葉が耳を伝い、心臓にぴたりと吸いつくような感覚を出久は得た。怖い。圧倒的な戦闘力を持つにも関わらず、それが彼の、彼らの何か深い部分を物語つている気がした。

「でも、これだけははつきり言つておくよ。俺は敵じゃない。ここにいる二人もだ……ここでのびてる敵たちについても、後で説明する」

翔はゆっくりと、言い含めるような調子で言つた。その眼差しは視線を交わらせたが最後、二度と目をそらせなくなりそうなほど真剣だ。出久は彼の頬に、小さな赤い斑点が散つているのに気づいた。

血。怪我ではない。おそらく先ほどの筋肉男の返り血だ。

どうしてだろう。そうした容赦ない暴力の跡を伺わせて尚、彼の瞳の明るさが一分も曇らないのは。

「話すよ。今話しておけることは、全部。疑わせておいて虫の良い話だけど、ひとまず信じ付いてくれないか？　俺たちの「家」に

## 第8章・アザミの家①

怖くなかったわけじゃない。むしろ実際に人に危害を加える姿を、その圧倒的な力を目の当たりにして、胸に抱える不安や恐怖は一回り大きくなつた。それでも付いてしまつたのは、きっとそれ以上に知りたかったからだ。それが期待していたものにしろそうでないにしろ、真実はもうすぐそこにある。今さら怖じ気づいて逃げるという選択肢は出久の中にはなかつた。

少なくとも、こうして翔が自分と真摯に向き合つてくれている間は。たとえそれが自分を騙す演技なのかも知れなくても。

信じなければ、扉に手をかけることもできない。怖くても信じるのだ。翔を追つてくる前に、そう覚悟を決めたのだから。出久は気持ちも新たに、叩きのめした敵たちを交番の前に置きにいつた翔を待つて、彼と彼の奇妙な仲間と共に路地裏を抜けた。

「自己紹介が遅れたね。私は南野桜。桜って呼んで」

路地裏を抜ける道中、金髪の少女が出久の前を歩きながら自己紹介してきた。鞭を華麗に操ったあの魔法のような指を自身に差し向け、にこりと笑う。

「個性は物体操作。ものにふれると浮かせたり、自由に動かすことができる。ただあまり複雑な動作をするものとなると難しいかな。さつきの羽とか鞭みたいな、簡単な構造のものは操作が楽だし、たくさん動かせる。人間や動物は操作できないけど、髪の毛、爪、もげた腕とか足とかは、本体から離れて時間が経つていれば操れる。植物も枯れていれば使える」

少女——もとい桜は、淀みない調子で自分の個性の説明をした。ま

るで今まで何度も同じ説明を繰り返しているかのようだ、実際に要領を得た説明だった。

「で、こつちは南野翼。恥ずかしながら、私の双子の兄だよ。個性は動物変化」

桜の指がひらりと動き、今度は左斜め前方に差し向けられる。彼女の指にならつて視線を動かすと、路地の端に立ち並ぶ塀を出久たちと同じ方向に歩く一匹の猫が目に止まつた。金色の毛並みが見事な茶トラの猫だ。猫はちらりと出久たちの方を振り返ると、またすましたように前に向き直つた。

この猫が個性により動物に変化した少年——翼であるとは、傍目からもとても見抜けないだろう。蛙や鳥など、動物と同じ身体的特徴の個性を持つ者は少なからずいるが、完全な動物に姿を変えられる個性は出久も聞いたことがないし、初めて見た。とても希少な個性だと言えるだろう。

「地球上に実在する動物なら何にでもなれる。虫とか魚でもね。さつきのを見たから分かると思うけど、サイズもある程度は調節可能。ただあまり人間とかけ離れた動物に長時間なつてると、人間であることを見れて戻れなくなることがある」

求めてもいらないのにつらつらと説明を続ける桜。あいつが戻れなくなると一苦労なんだよねえ、と頸に手を当てるため息をついている。ここまで細かに個性に関する情報を話してくれるということは、信頼されているのか。いや、それとも、知られたところでお前など一捻りにできる、という脅迫めいた意図が込められているのか。信頼されるようなことをした記憶はまったくないし、後者の方が濃厚そうだ。

それにしても、と出久は考えた。動物に変化できる個性。物体を作できる個性。前者は間諜や情報収集の面にはこれ以上ないほど長けているし、戦闘力も申し分ない。後者は言わずもがなだ。敵が持っている武器を触れるだけで無効化し、それどころか自由に操り自らの得物とすることができる。それでなくとも世の中には数え切れないほどの物体が存在していて、彼女はそのすべてを味方につけることができのだ。強力で戦闘の幅も広い、素晴らしい個性だ。あくまで彼らをヒーローという視点から見れば、の話だが。

「すごい……どつちも強力な個性だ」

思わず口に出してしまった。出久の言葉を聞いた桜が後ろを振り返り、笑う。

「それを言つたら君の個性もすごいでしょ。ワン・フォー・オール。あれほどのパワーを発揮できる個性なんて他にないよ」

「そうか。そりやそうだ。パワーやスピードでワン・フォー・オールの右にでる者はいない。何と言つてもN.O.1ヒーローの個性なのだ。自分のことを褒められたわけでもないのに何だか恥ずかしくなり、出久ははははと渴いた笑いを漏らした。

「そ、そうだね！　でも、君たちの個性も十分すごいよ！　今まで見たことのない個性だし、ヒーローでも他の職業でも活躍しそうだよね。色んな使い方ができそうだよ」

出久の言葉に、桜は貼り付けたような笑顔を浮かべた。

「君は個性が好きなんだね。でも、」

桜が笑んだまま前を向く。その寸前、彼女の猫のような美しい顔か

ら、みるみるうちに笑みが失われていくのを出久は見た。鏡のよ  
な、まるで色のない冷たい表情がぬるりと彼女の顔を覆う。

「個性なんてそんないもんじやないよ」

妙に抑揚のない声で放たれたその言葉の真意を、この時の出久は知  
る由もなかつた。ただその言葉に先を歩いていた翔が少しだけ振り  
返り、静かに長い睫毛を伏せたのが——その光景だけが何故か、鉤針  
のように痛みを伴つて胸の内側にぶら下がつていた。